

1997年3月20日
木曜日 午後4時14分



炬燵と姪と、
冬の夜 2
その後...

「ただいま。」

「おかえり。寒かったでしょ。早く炬燵で暖ま、あ、あ、まってその前にこれ、おじさんとこに持っててくれない？こめんね。」

「シチュー？…わかった。」



もう春なのに、ここ数日真冬がぶりかえしたかのようにひどく冷え込む。身体の温まるシチューは、いいね。

2ヵ月前。
家族に内緒で叔父さんと
セックスをした。

大晦日の夜：いや元日の深夜？ん？
まあいつか。

あの日もひとときわ寒い一日で
近所の犬の遠吠えにも悲壮感があつたな。
家の中でも白い息が出てた。

おばあちゃん
おにぎりも
作ってあげて

そうだね

叔父さん
大きいの
ほおぼるのが
好きみたい…

はいよー

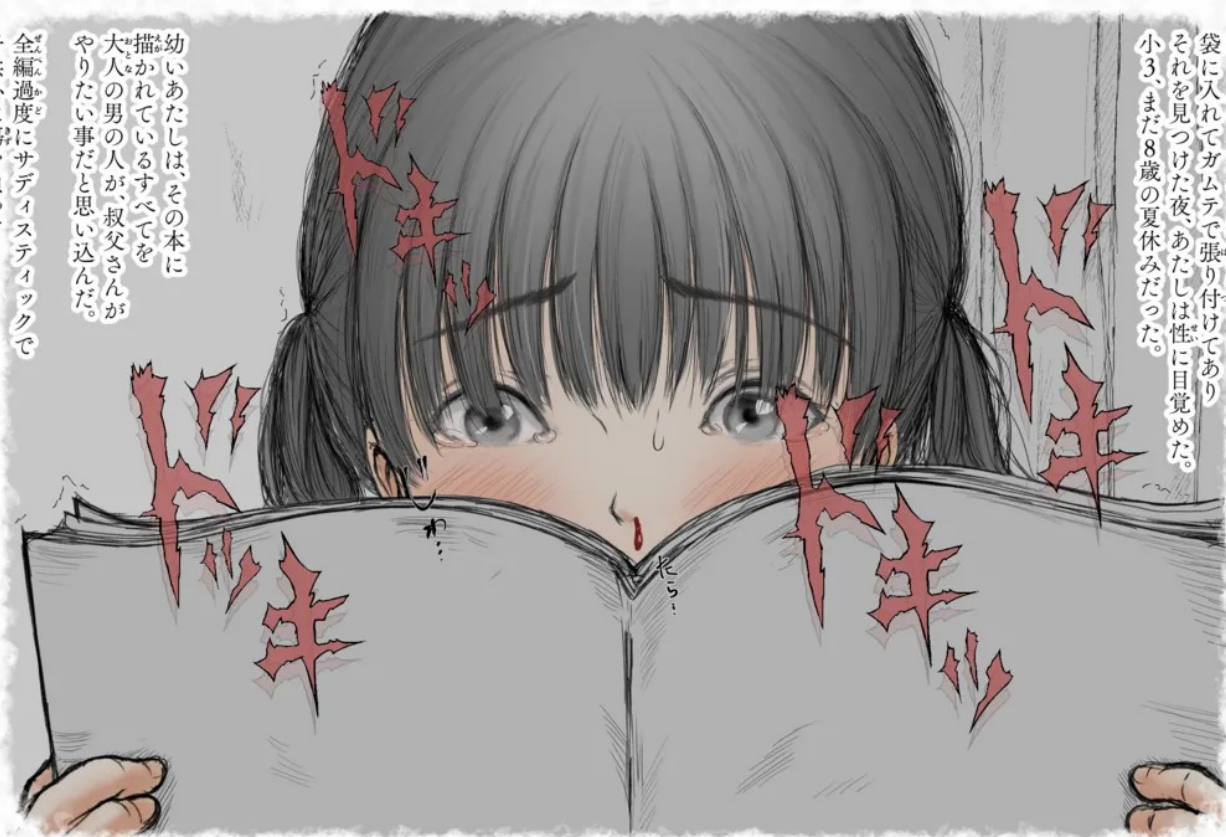
朝、おばあちゃんから
久しぶりに叔父さんが帰ってくると
聞いて、嬉しくて。

でもあたしはきつと怖がられてるから
安直に喜んでいいものか
不安でもあった。

長いけと経緯。



2Fのあたしの部屋は元々叔父さんが使っていた部屋で昔やったまま忘れてしまったのだろう、押し入れの下段の板の裏にイケナイ本が袋に入れてガムテで張り付けてありそれを見つけた夜、あたしは性に目覚めた。小3、まだ8歳の夏休みだった。



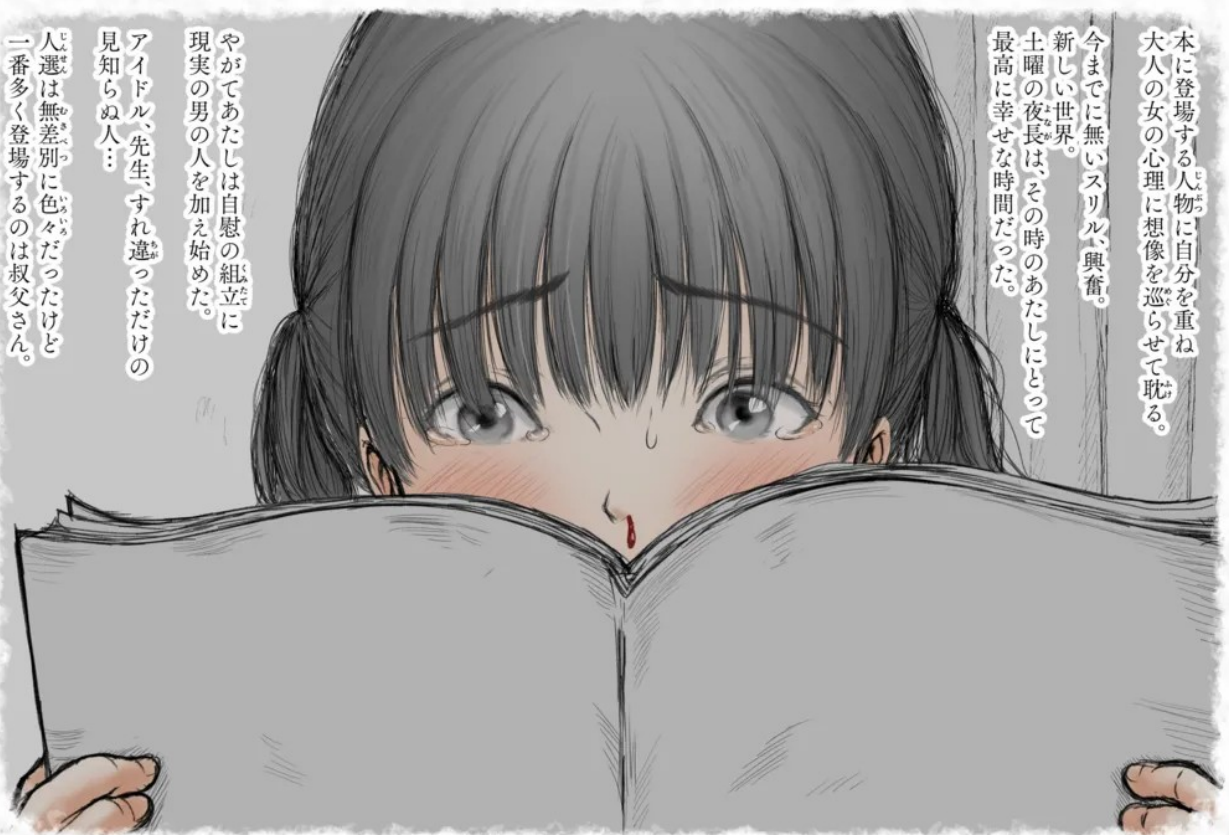
幼いあたしは、その本に描かれているすべてを大人の男の人が、叔父さんがやりたい事だと思い込んだ。

全編過度にサディスティックで子供心に傷を負ってもおかしくないそれら内容はしかし、なぜかあたしにとって『OK』だった。

自慰の所作を覚え
1ヶ月後に初めてのオーガズムを知り
3ヶ月もすると自在にそこへイけるよう
なっていた。

本に登場する人物に自分を重ね
大人の女の心理に想像を巡らせて耽る。

今までに無いスリル、興奮。
新しい世界。
土曜の夜長は、その時のあたしにとって
最高に幸せな時間だった。



やがてあたしは自慰の組立に
現実の男の人を加え始めた。

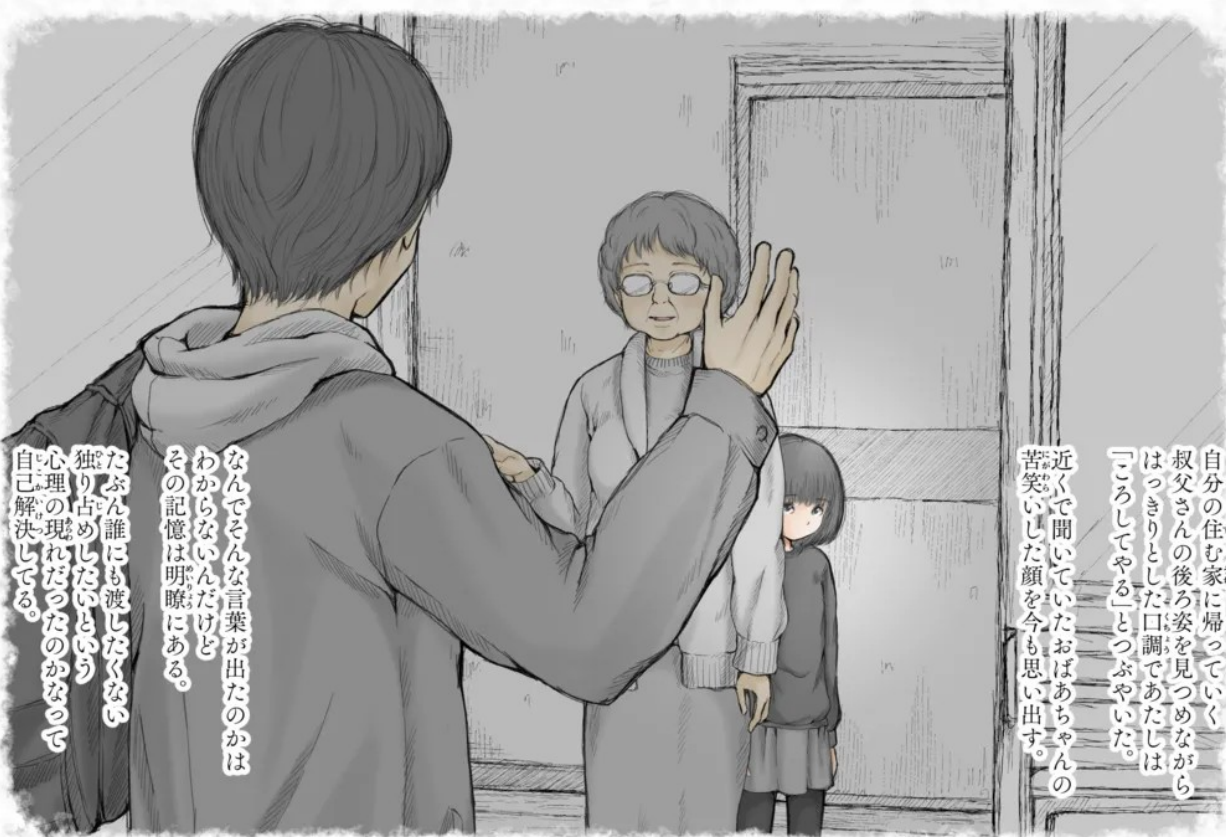
アイドル、先生、すれ違っただけの
見知らぬ人…

人選は無差別に色々だったけど
一番多く登場するのは叔父さん。

…初恋の人。

あれは6歳の時。
…たぶんそのぐらい。

いつものように正月に帰省して
三が日を過ごした後
自分の住む家に帰っていく
叔父さんの後ろ姿を見つめながら
はつきりとした口調であたしは
「ころしてやる」とつぶやいた。
近くで聞いていたおばあちゃんの
苦笑いした顔を今も思い出す。



なんでそんな言葉が出たのかは
わからないんだけど
その記憶は明瞭にある。
たぶん誰にも渡したくない
独り占めしたいという
心理の現れだったのかわからず
自己解決してる。

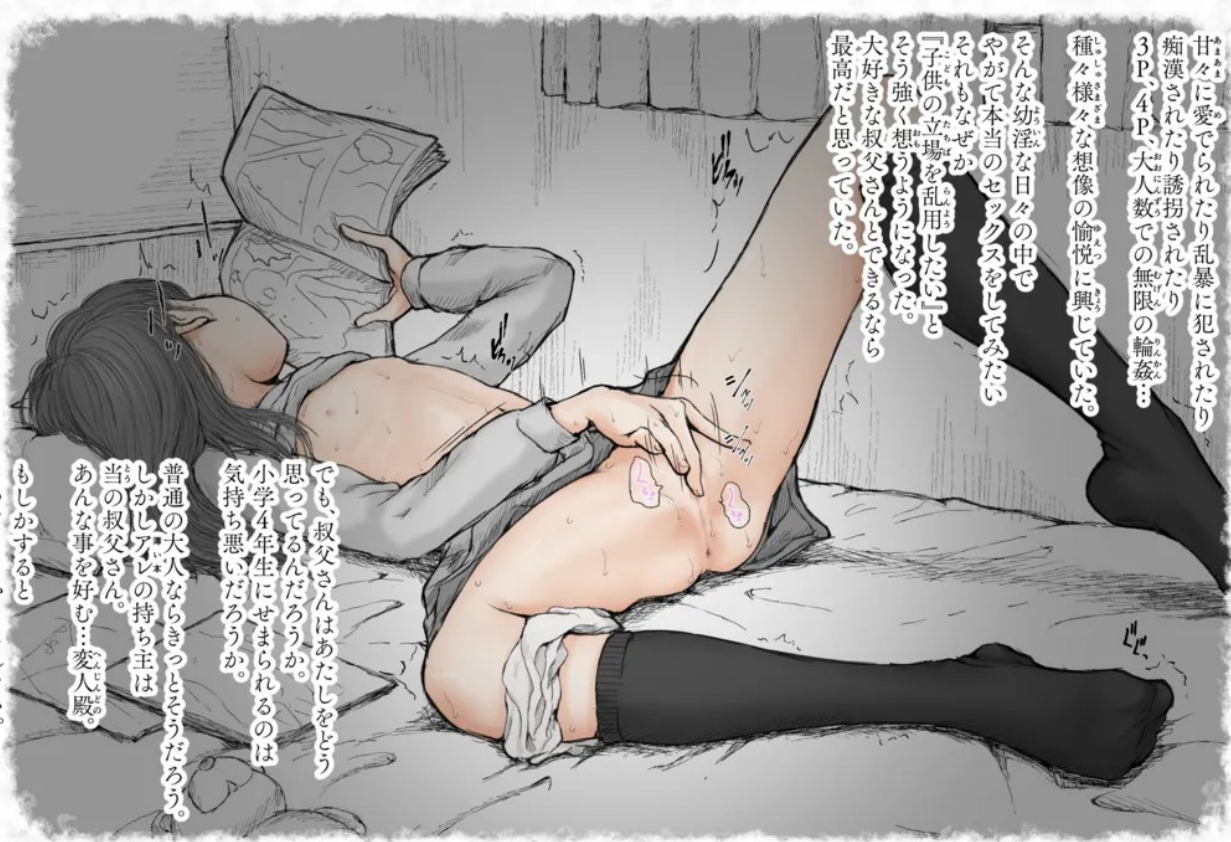
とにかくその頃から叔父さんを
好きになった。

小1で叔父さんに初恋をして
小3で秘蔵本による性の開花。

4年生の頃には妄想世界の開拓も進み

甘々に愛でられたり乱暴に犯されたり
痴漢されたり誘拐されたり
3P、4P、大人数での無限の輪姦！
種々様々な想像の愉悅に興じていた。

そんな幼淫な日々の中で
やがて本当のセックスをしてみたい
それもなぜか
「子供の立場を乱用したい」と
そう強く思うようになった。
大好きな叔父さんときけるなら
最高だと思っていた。



でも、叔父さんはあたしをどう
思ってるんだろうか。
小学4年生にせまられるのは
気持ち悪いだろうか。

普通の大人ならきつとそうだろう。
しかしアレの持ち主は
当の叔父さん。
あんな事を好む…変人殿。

もしかすると

ノってくるかもしれない。

行動を起こせば

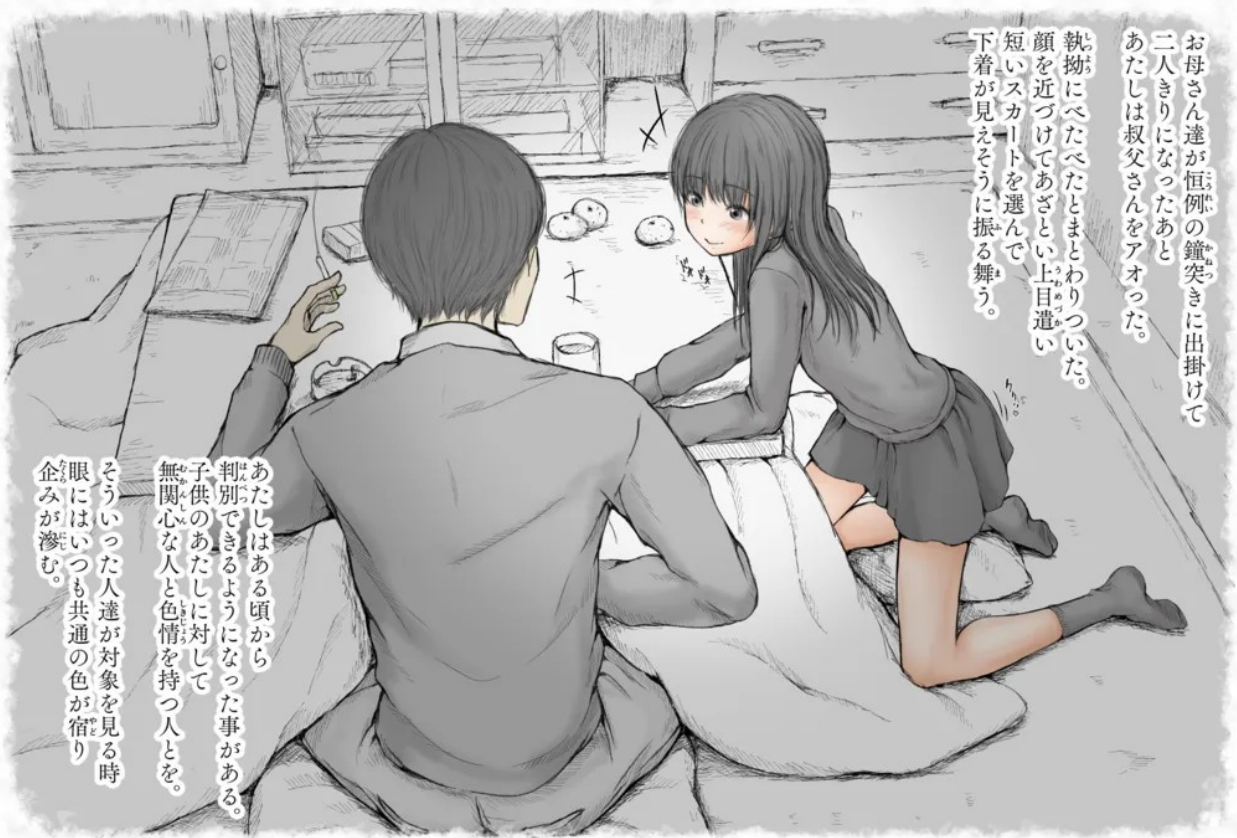
何かが起きるかもしれない。

勝手な算段に期待で胸が膨らんだ。

そして待ちに待った大晦日の夜。
その年もいつも通りに
叔父さんは帰省して、炬燵でおしゃべり。

お母さん達が恒例の鐘突きに出掛けて
二人きりになったあと
あたしは叔父さんをアオった。

執拗にべたべたとまとわりついた。
顔を近づけてあざとい目遣い
短いスカートを選んで
下着が見えそうに振る舞う。



あたしはある頃から
判別できるようになった事がある。
子供のあたしに対して
無関心な人と色情を持つ人とを。
そういった人達が対象を見る時
眼にはいつも共通の色が宿り
企みが滲む。

いつしかあたしも
その眼差しに密かで淫らな
性の高揚を覚えるようになった。
早熟だなと自分でも思う。

それは『おじさん』の眼にも表れた。
やっぱりそうだった。
サド氣質の人に多いらしい傾向。

叔父さんはその類の人だ。
あたしの事『有り』だ。

下着が濡れるのが分かった。
あんなに興奮したのは
初めてイケナイ本を読んだ、あの夜以来だった。

鐘突きに行ったお母さん達が
帰ってきたら、事は進まなくなる。
また来年まで持ち越し。

気持ちが焦る。
隠してるつもりだったけど
たぶんバレバレだったと思う。

本や妄想と現実の違い
それはちゃんと区別していた。

飯にあたしが、叔父さんが食指を
伸ばすに足る素材だとして
一体どの程度まで
叔父さんはするだろう。
したいと思っているだろう。

じゃれ合って偶然を装い
触ってくる……

そんな戯れ事やダ。
ちゃんと大人の本当のやつをしたい。

不安は杞憂に、現実にはあたしの
望んだままに進んでいった。



叔父さんの膝の上に座って
炬燵に入ったまま、あたしは足を拡げる。
あたしの髪の毛をクンクンと嗅ぎながら
叔父さんはパンツ越しに、あたしのアソコを触る。

一番敏感なところを柔らかく
しかし執拗に捏ねられる。
自分でするのは倍は違う快感の強さに
怖くて泣きそうになった。

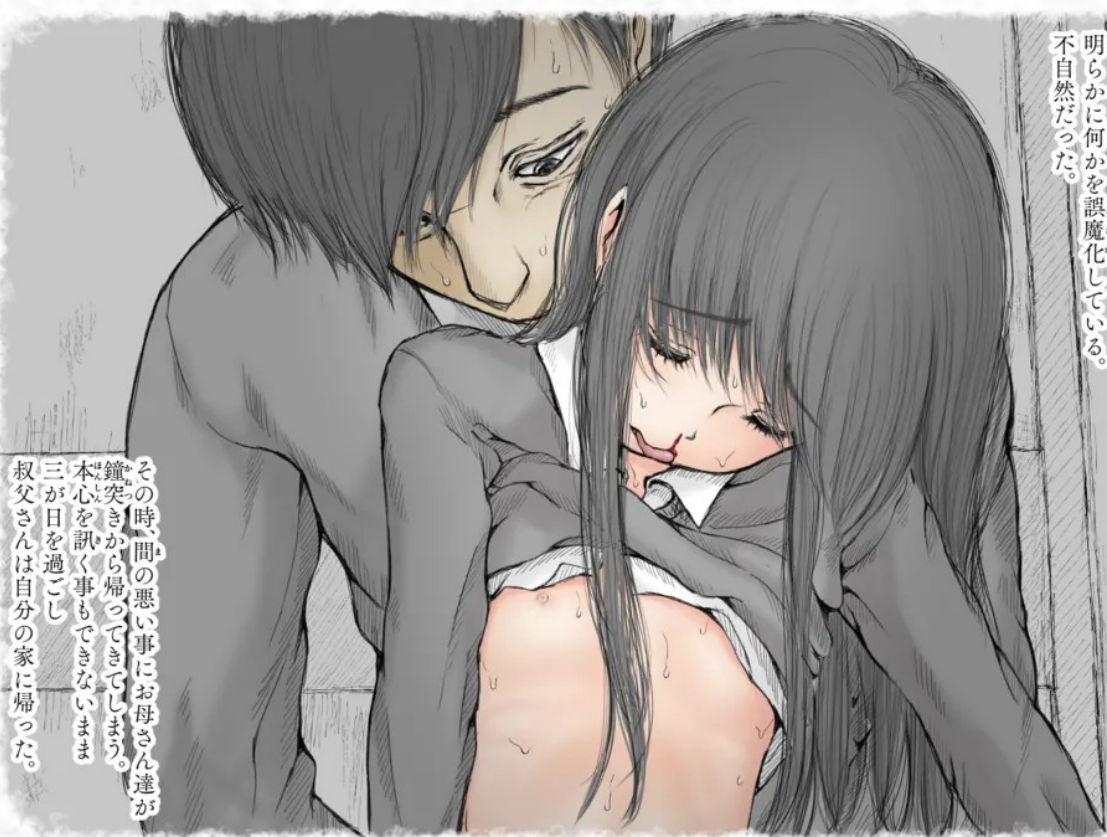
津波が引く前にその津波を飲み込む
大津波がやってくる、みだいなあの繰り返し。
全身が揺れて、頭がどこかに
飛んでいきそうだった。

それと同時に幼くも淫らに重ねた
妄想世界が想像通りに
幸せな聖地だった事にも
感動して泣きそうになった。

ズボン越しに何度か触れた叔父さんの
カチカチのモノ。
アレをあたしは欲しかった。
入るのかどうかすら怪しかったけど。
気持ちよくななくても、痛くても
お腹の中に入れてしまいたかった。



でもそれを求めた途端
叔父さんは眼から涙みを消した。
小学生だからまだ駄目と言っていたけど
明らかに何かを誤魔化している。
不自然だった。



その時、間の悪い事にお母さん達が
鐘突きから帰ってきでしまふ。
本心を訊く事もできないまま
三が日を過ごし
叔父さんは自分の家に帰った。

そして…
叔父さんは帰省しなくなった。

当時のあたしには何がなんだか
全くわからなかった。

いつものアレだと考えるしかない。
人と仲が良くなりかけても

ある日、急に敵意を向けられる
あたしの「なんでいうかパターン」。

「あいつは頭がおかしい」
「意味わかんなくて怖い」

そんな陰口は何度も聞いた。

きっと自分では分からない
意識できていない不快な言動行動を
あたしはそこかしこでやりながら
生きてるんだろう。
だから友達がいらない。できない。

でも、叔父さんだけはあたしの
その「何かしら」に反応がない。
昔から。

毎年お正月に帰ってきては
親以上に可愛がつくれる。
何を喋っても、どんな事をしても
笑うか、普通に怒る。

あたしへの嫌気を溜めて
堪り兼ね突然豹変されるより
その場で、理由つけて叱られる方が
ずっといいんだよね。

しかし、あの日とうとう

あたしはやらかした。

叔父さんですら引いちゃう何かを
やらかしたんだと
そう思うしかなかったんだよ。



それから3年後の年の瀬。
叔父さんは久しぶりに
帰ってきてくれた。

(すごい太っててびっくりした。)

おばあちゃん達が出掛けるのを
狸寝入りで待ってる間
すごく緊張したなあ。

その後の事は皆さん
ご存じの通りです。
(読んでくれた?)



『時間をくれ。
痩せて、生活基盤を近くに移動して
改めて俺から告白しに参る。』

宣言通りだった。

あれからの叔父さんは早かった。
すぐに会社を辞めて本当に近くへ
引っ越してきてくれた。

別にお腹ブヨブヨのままだでもいいのに

無理やり絶食ダイエットして
昔みたいにスリムになり

ケーキとメリーチョコと

バラの花束を携え、正装で告白された。

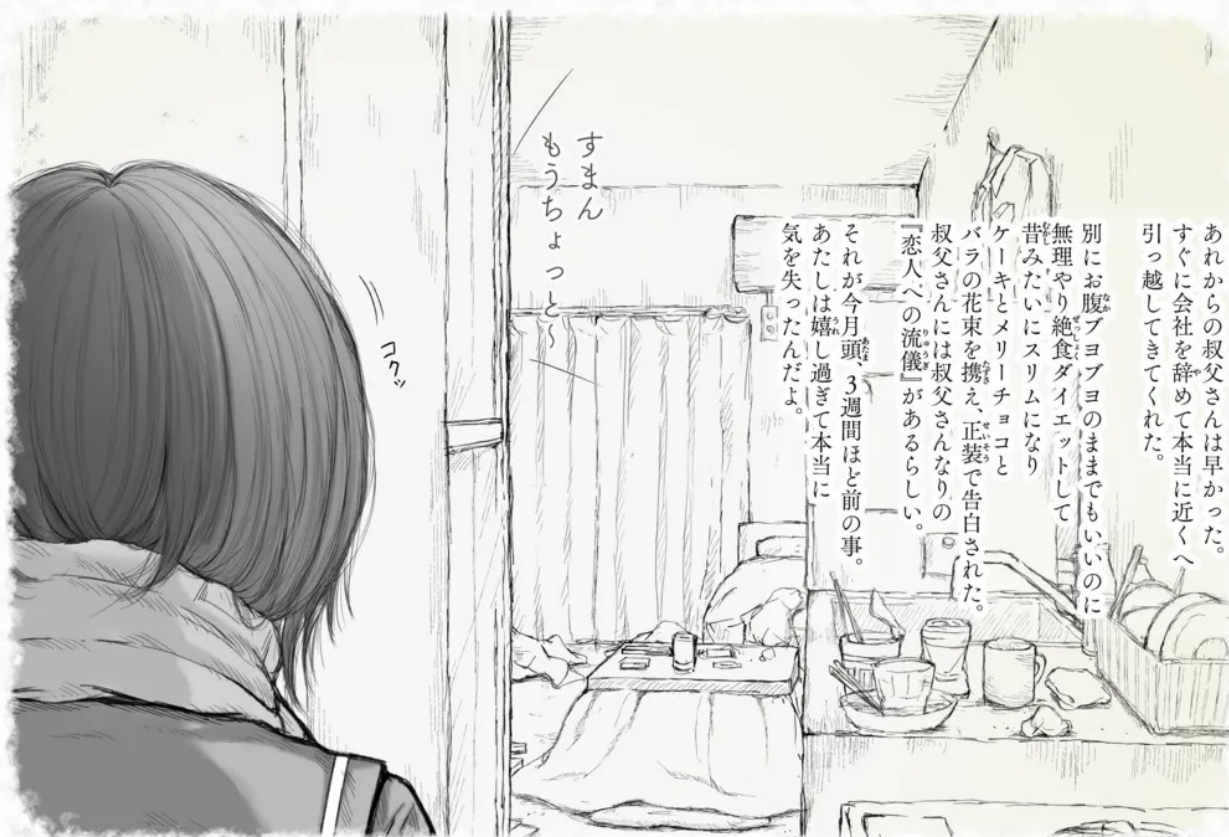
叔父さんには叔父さんなりの

『恋人への流儀』があるらしい。

それが今月頭、3週間ほど前の事。
あたしは嬉し過ぎて本当に

気を失ったんだよ。

すまん
もうちょっと



ちなみに叔父さんの引越しには
追い風が吹いた。

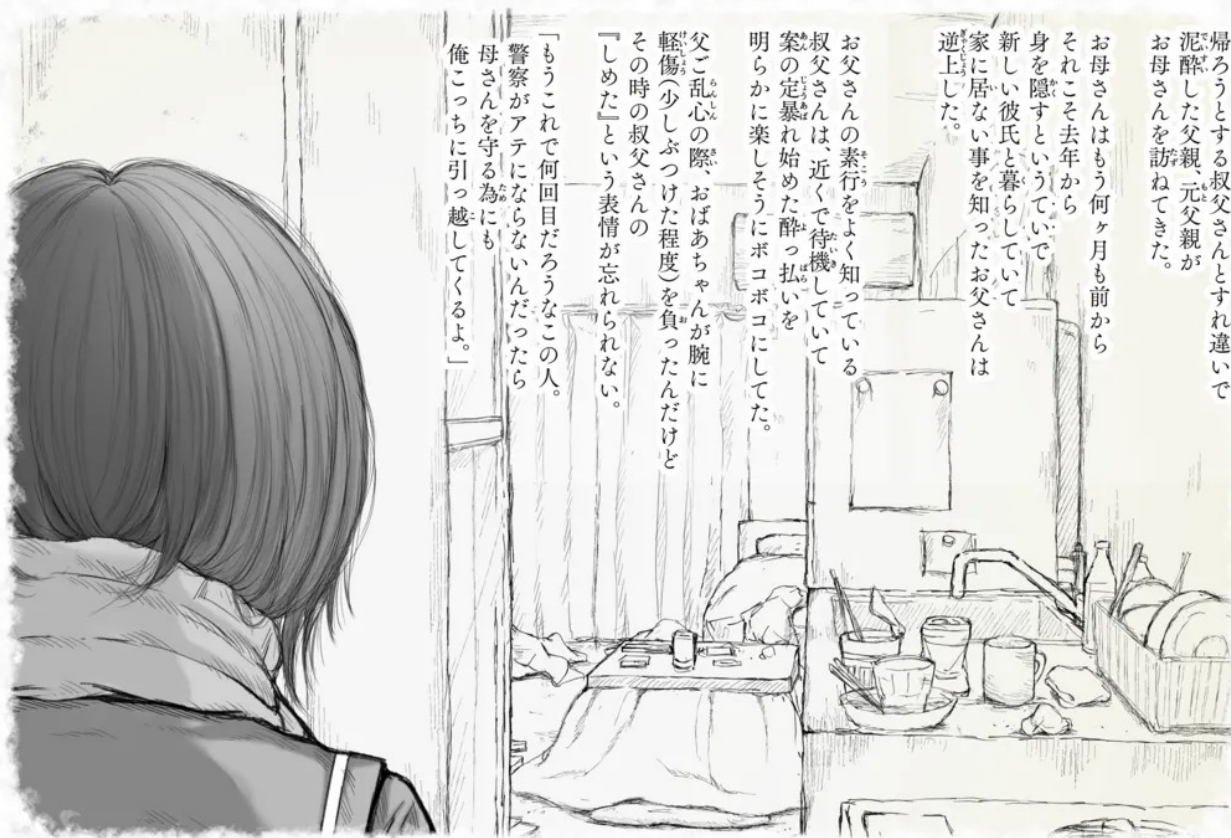
(関係を結んだ後)三が日を終えて
帰ろうとする叔父さんとすれ違いで
泥酔した父親、元父親が
お母さんを訪ねてきた。

お母さんはもう何ヶ月も前から
それこそ去年から
身を隠すというて、
新しい彼氏と暮らしていて
家に居ない事を知ったお父さんは
逆上した。

お父さんの素行をよく知っている
叔父さんは、近くで待機していて
案の定暴れ始めた酔っ払いを
明らかに楽しそうにボコボコにした。

父ご乱心の際、おばあちゃんが腕に
軽傷(少しぶつけた程度)を負ったんだけど
その時の叔父さんの
『しめた』という表情が忘れられない。

「もうこれで何回目だろうなこの人。
警察がアテにならないんだったら
母さんを守る為にも
俺こっちに引越してくるよ。」



おばあちゃんは喜んでた。
そりゃそうだよ。

孫（あたし）が産まれるきっかけで
家を出て何年も経つ息子が
近くで生活してくれる。
自分の身を案じて。

いつもは岩みたいな顔をしているのに
くしゃっと綻ばせて、おじいちゃんも
嬉しそうだった。

叔父さんはままと
誰にも警戒される事無く

順風満帆な社会生活の近況的には
就職氷河期と言われてるらしい昨今に
不釣り合いな動機の転職と

部屋が余っているのに
わざわざ余計な出費が生じるアパートを
実家の近所に借りるという
やや不自然な引っ越しを完了させた。

あたしだけが真意を知ってる。
叔父さんは、いろいろなものを捨てて…



姪との秘めた関係を選んだ。
選んでくれた...

「お待たせ。」
「あ...銅あぶない...」

「よしよし
ちゃんとノーブラで来たな...」
この部屋を訪ねる時は
下着非着用なり♪

なんか最近さ
急に冬に戻ったみたいだよな。
外寒かったろ？
おっぱい鳥肌立ってんじやん。
すぐ暖めてやるからな。」
「なべ...」

「ほらナベ、いやべ口出せ。」
「...ん...」

ふいに始まった幸せな日々♪
でもね、少しだけ困ってる事があるんだよ。



お正月に初めてセックスしてから
この3月まで二度目は無かった。

機会を作ろうと思えば

いくらでもできた筈なんだけど
叔父さんは頑なにそうしなかった。

何か思う所があるのがわかるし
それは大人の複雑な事情から
発するものかもしれない
中学生のあたしが軽々しく
意見する事ではないとも思った。

シチュー
こぼれるっ

シチュー♡♡

シチュー♡♡

ちゅほ♡
ちゅほ♡

くちゅくちゅ

そして今月に入って
やっと1回してもらえた...。
土曜日の夜に
家を抜け出しこのアパートで。

関係の約束。

『学業に支障をきたさない。』
『会う為に強引な事をしない。』

叔父さんが決めたこのルールに
則って機会を伺うと
行為に到れるのは
叔父さんの仕事のシフトとかみ合う
土曜日の夜だけになる。
それも時間にして2時間ぐらい。

叔父さんは、じらそうとして
やっているのか
今までの経験則に実直に
従っているだけなのか…

セックスの多幸さを覚えた直後に
こんなに間隔を空けられ
さらには自宅での自慰をも
禁じられ…(不服!!)

わかるよね

「堪らない」んだよ。

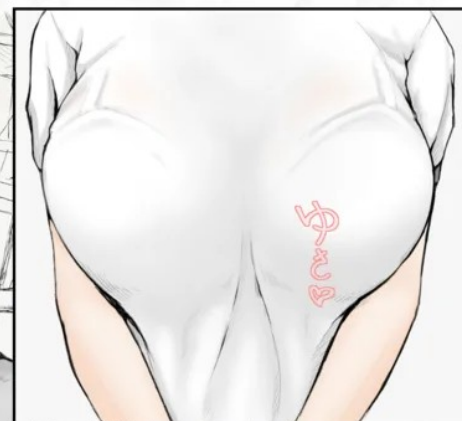
お正月からずっとそうなんだよ。

常時発情。授業中だって発情。
もそもそ落ち着かなくて
勉強どころじゃない。
むしろ学業に支障を
きたしてるんだよ。

見る夢はことごとくミダラ。
女でも夢精ってあるのかな？
そしたらちよっとは生活が
楽になるはず。

夢精なら自慰じゃないから
言いつけを破ってない。
夢精を切望して
眠りにつく女子中学生なんて
普通じゃないんだよ。





あたしはキスが好き。
叔父さんに、よくねだる。

そして叔父さんのキスはタバコの味。
吐息だけじゃなく、髪や服も
ヤニの匂いがする。

近頃のあたしは
この、体臭と紫煙が混じって醸す
独特の匂いを嗅ぐだけで
反射的に胸がときどきする。
性的な連想が頭の中を
まっピンクに染める。

パブロフの♀犬だ。

この前、体育教室に倉庫の鍵を
取りに行ったら、体育の先生が一人で
タバコを吸いながら書類に目を通していて
ふいに呼び止められた。

とりとめもない話を10分ぐらい
聞かされてたんだけど

その間中、なんのためらいも見せず

真っすぐに胸を注視された。

体操服だったから下着が透けて

余計に恥ずかしかった。

密室とタバコの匂いと滲む視線。



叔父さんに自慰禁されてなかったら
はしたなくも、それを燃料にして
その夜何回もしてたと思う。

あたしは多淫だ。

あたしがそんなエロガキだって
見抜いてる叔父さんは
いつもこんなふう
に身体いろんなところに火をつけて
でも決してイカさないように
加減して遊ぶ。
遊んでるに違いない。



近頃、さすがにキツイ...





だめめえ〜♪

いつてもいいって
言って...

ねえ...
ねえっ
いきたいよっ
も、おりっ

ねえっ!お願い...だよ...

だめ〜♡〜めえ〜♡
再来週の土曜日まで
お♡あ♡ず♡♡

イッくっ!
イッくっ!
イッくっ!

も
も



だめめえ〜♪

いつてもいいって
言って...

も、おりっ

ねえ...
ねえっ
いきたいよっ

ねえっ!お願い...だよ...

だめ〜♡〜め
再来週の土曜日
お♡あ♡ず♡♡

グッ







叔父と姪という近親
大人と子供という背徳
…の恋愛。

そんなあたし達を勘ぐる可能性があつて
勘ぐられてマズイ相手は
お母さん、おばあちゃん、おじいちゃん。

お母さんは件の理由で居ないし
おじいちゃんはおたしに関心が無いから
一番気をつけなきゃいけないのは
おばあちゃん。

おばあちゃんの中で何らかの疑念が
芽生えた時
思い返す記憶の中に確信に到る
『出来事』を残さない為に

こういった、ふいに会えた時こそ
そつけない程とつと帰宅してきた
そんな痕跡にしなければならぬ。

叔父さん曰く。

だから、もくもくとシチューを啜る
叔父さんの租借ほっぺの動きを
ゆっくりと眺めていたのだけと
もう、すぐにでも帰らないといけない。
でも…。

(…どうかな…
迷惑に思ふかな…

……言ってみるだけなら…
あとはおじさんに決めて…
もらって…)



「おじさんね…」
「なんだ？」

「明日仕事？」
「ああ、夜勤だけと。」

「だよ。夜勤って何時から？」
「22時から。」

「22時って…えと10時か。」
「ああ、どうした？」

「うん…。じゃあ今夜は夜更かし？」
「そうだよ。無理してでも
起きておかないと明日きつい。」

「なにをするの？友達呼ぶ？」
「いや、ひとりで。」

「映画観るか…んーなんか。」

「映画か。あたしも観たいな。
おじさんと観たいな。」
「お前とは観ない。」

「え、なんで？」
「横でエロいから落ち着かない。」
「♡じゃ、じゃあ…ソレでも
……いい。そっちでもいい。」

「お前ほんとセックス好きだな。」
「そ、そんな事ない。
思春期平均。」

「平均ではないだろ絶対。
まあいいとして、明日金曜だぞ。
学校だろ？」
「だから何度も言ってるじゃん。
俺はお前の彼氏である一方
保護者的な立場もある叔父として
学校に障るような事はしないって。」
「うん。金曜なんだけど…」

「……なんだよ。」
「うん…」

「え、なに？……あつ。」





(早く、早く夜来てっ♡♡♡)

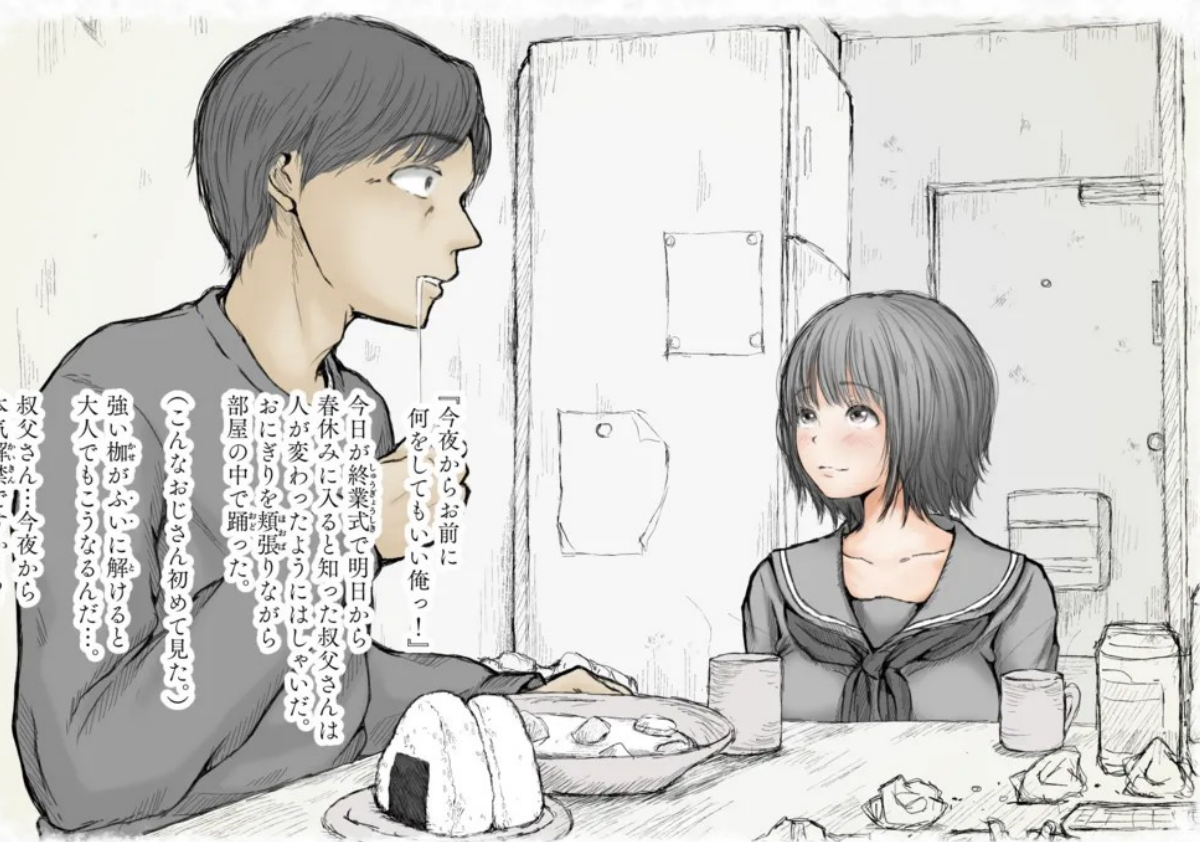
叔父さん…今夜から
本気解禁ですか…?
あたしいっぱいイける?
いろんなコトされる?

強い枷がふいに解けると
大人でもこうなるんだ…

(こんなおじさん初めて見た。)

今日が終業式で明日から
春休みに入ると知った叔父さんは
人が変わったようにはしゃいだ。
おにぎりを頬張りながら
部屋の中で踊った。

『今夜からお前に
何をしてもいい俺っ!』



それから数時間後。。



約束の時間にこっそりと玄関を出ると、すぐ近くの電柱の影で叔父さんが寒そうにタバコを吸いながら待っていた。屋でも冷えるんだから夜は尚更に。

うちは1階の炬燵の部屋の横でおじいちゃんおばあちゃんが9時頃にはもう寝ていて二人とも朝までめったな事では起きない。

2階は奥があたしの部屋廊下側がお母さんの部屋なんだけど例の事情でお母さんは居ないので現在夜の11時、離なく外へ出てこれた。

夜中に家を抜け出すのでドキドキするね。しかも叔父さんと密会する為に。

今日は二晩中二人きりでゆつくりとできる。こんな初めで。何年もこの日を夢見たよ。

あ、ゆつくりとはできないか。体操服を着て上靴まで持つてこいなんて。

今夜はいい…。どんな事が起こるの…かな？♡



家から叔父さんのアパートの途中にある
コンビニに差し掛かった時
ふいに暗がりに連れ込まれ
イタズラされた。

コートの中で体操服をめぐり
ブルマをヒザのところまで
スラされて
そのまま二人でタバコを
買いにいかされた。

店員さんはもちろん
表でたむろしてるコワイお兄さん達の
ロン毛の人に何してるかバレてた。
目が合ったから分かったんだよ。

あたしは背も低いし身体も華奢。
胸だけは大きいけど……
身体全体のパーツが
ミニマムなので
遠くからだと普通の
身長に見えるみたいで
すれ違う人に
「あれ、小さい」って
言われた事が何度かある。
中学の制服を着てないときは
小学生だと思われでる。
夜中にコートの中で服を脱いでる
小学生とおぼしきあたしに
店員さんは目を丸くしてた。
そして色を滲ませた。
コワイお兄さん……
それを見て密かに胸が高鳴るあたし。

あたしの貌を見て、それら全部を
読み取った叔父さんは
とても良い顔でニヤニヤしてた。

アパートに着くと叔父さんは
あたしを玄関に立たせたまま
「ちよつと中を見せてくれ。」と
含みを利かせた命令口調で言つた。
その場で、という意味だ。

あたしは自分でコートを足元に
落として
乳房とアソコを冷えた夜風に晒す。
感情が昂ぶつて熱つた身体に冷気を浴び
全身に鳥肌が立つ。

叔父さんはあたしを外に立たせたまま
ひとりで部屋に入り距離を
置いて満足そうに眺めている。

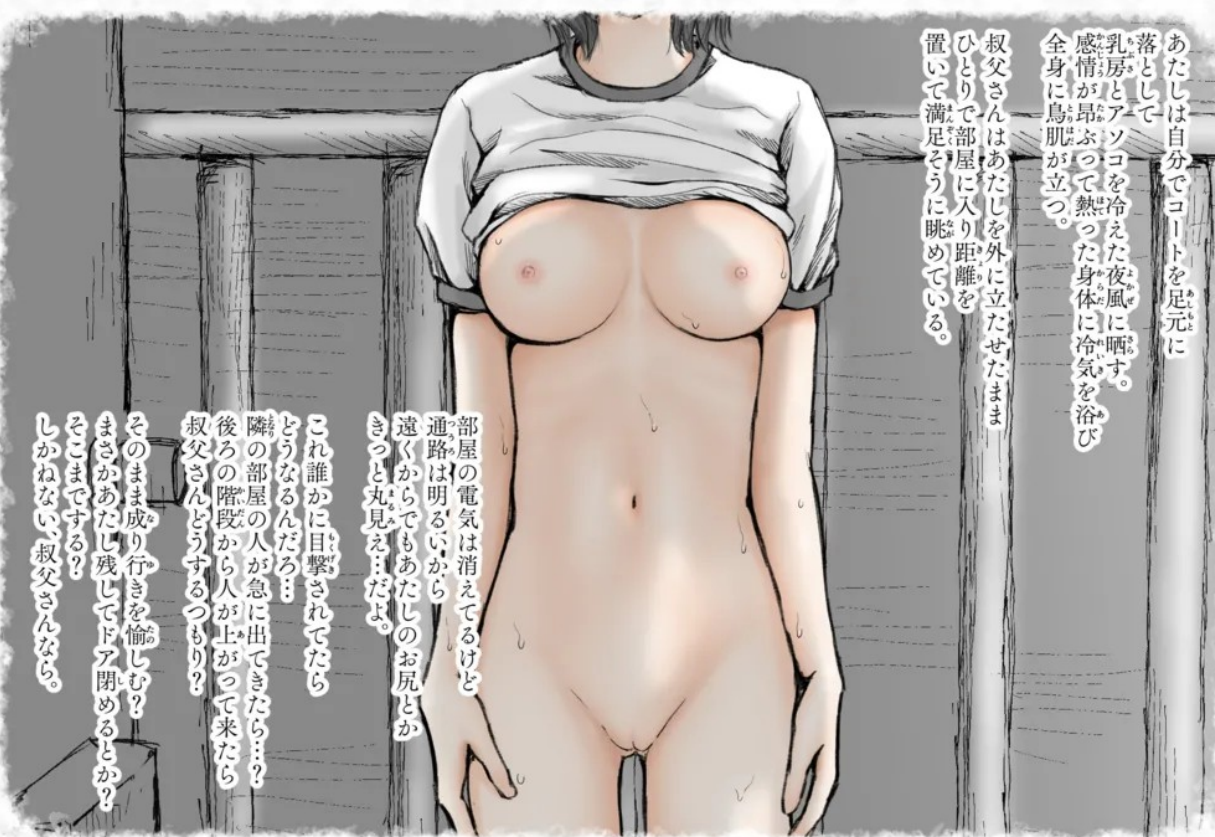
部屋の電気は消えてるけど
通路は明るいうから
遠くからでもあたしのお尻とか
きつと丸見えだよ。

これ誰かに目撃されてたら
どうなるんだろ...
隣の部屋の人が急に出てきたら...?
後ろの階段から人が上がつて来たら
叔父さんどうするつもり?

そのまま成り行きを愉しむ?
まさかあたし残してドア閉めるとか?
そこまでは...?
しかねない、叔父さんなら。

あたしさっきのコンビニぐらいの
程度なら...その...ウェルカム...
なんだけど...

これはずいぶん上級者向けの...





人！上がって来た！



（おじさんっ…どうするの!!）

叔父さんは僅かに焦る
素振りをしたけど
交わらず少し離れて眺めているまま。

（おじさんっ…ねえっ!!）

背後からとんとん近づく足音に
たまらず声が出た。

「お、おじさんっ…!」

叔父さんは寸でのところで
あたしを引き入れドアを閉めた。
厚い金属のドア越しに聞こえる足音が
階段を上がって来た歩調のままで
通り過ぎ、隣の部屋へ入っていった。

「ふっ……ははっ……焦った。」

焦ったのはこっちなんだよ。
心臓が破裂するかと思った。

叔父さんはタバコ味のキスをしながら
あたしのアソコをまさぐる。
入り口を撫でまわし、少しだけ
指を挿入し、すぐに引き抜いた。
その僅かな動作だけで
達してしまいそうな程
全身が敏感になっている。

あたしの目の前に濡れた指を
差しだして

「すっ……ははっ……ロム。」

見せられなくても
どうなってるかは自分でわかてる。

叔父さんは満足げな顔をしている。
露出遊びでこんなになっとな
思っただろう。

いや、きつ……そうなんだと思う。
びっくりしたし

ほんとに怖かったけど……
でも、背筋にびりびりと走ったソレは
確かに気持ちの良い何かだった。
自分が真性なんだと思い知る……





家には何時に帰らなきゃ
ならない？4時？

6...じ.....

ん、念のため5時にしよう。
今0時だから5時間か。
...ずっとだぞ？がんばれよ？

よ、余裕...

ははっ



…我が姪っ子よ…
すごいぞ…
すごい…すごいすごい…
すごい…

………?

ツルツルびかびかで
すごく綺麗だぞ♡
新品って感じ
叔父さんは誇らしい

やっぱり撮る
はい、始めよう

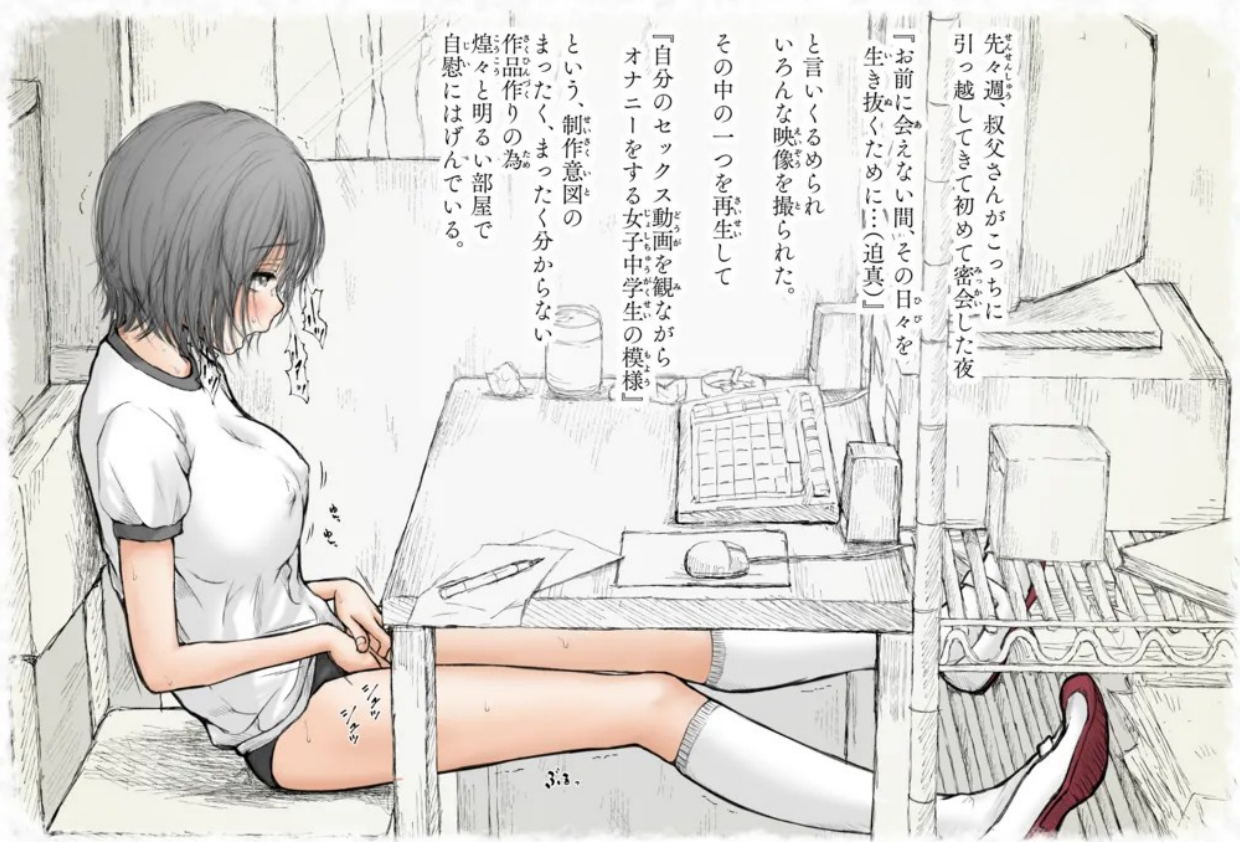


もっと
本気出そう〜♪

部屋に上がると叔父さんは
あたしの体操服を整え
上靴を履かせて
パソコン机に座らせた。

画面には動画が準備
されていて
その内容を示す小さな画像には
あたしが写っていた。

(これ…この前のだ…)



先々週、叔父さんがこつちに
引っ越してきて初めて密会した夜

「お前に会えない間、その日々を
生き抜くために…（追真）」

と言いくるめられ
いろんな映像を撮られた。

その中の一つを再生して

「自分のセックス動画を観ながら
オナニーをする女子中学生の模様」

という、制作意図の
まったく、まったく分からない

作品作りの為

煌々と明るい部屋で
自慰にはげんでいる。

いくらあたしにその気があっても
イヤな恥ずかしさはある。当然。
感じてる時やイク時の
無様に歪んだ顔を撮られて
叔父さんに後でじっくり鑑賞される
なんていうのは、とても抵抗があった。

そう伝えると叔父さんは
「お前、セックスしてる時の顔
超かわいいぞ？」

などと真顔で言う。
何度質問しても本当だと言った。

「な？かわいいだろ？」

ほら、このびくんってした時に
見せる恥じらいとか超エロい♡
そう思うだろ？」

「う…ん…」

動画では制服の冬服を着たあたしが
叔父さんの指を吸いながら
あん♪あん♪と喘いでいる辺りが
流れている。

（変な顔…
不細工だなあ…やだな…）





「あ、今腰がちょっと
グラインドしたなあ〜♪
気持ちいいか、そうかあ〜♪」



「ほら、カメラ、こっち見ろ。
気持ちいいか？」

叔父さんは女の子の自慰映像を
集めるのが好きらしく
過去の彼女にも幾度となく
させてきたと煽られた。

あたしがやらないわけには
いかない。

と、まんまとおじさんに
ノセられて
この前も時間が無い中
3回ぐらいさせられた。

多くがそうだと思うけど
セックスしてるところより
『こういう行為』を視られる方が
何十倍も恥ずかしい事だ。

あたしが13歳だって
超多感なお年頃だって
わかってるのかな。

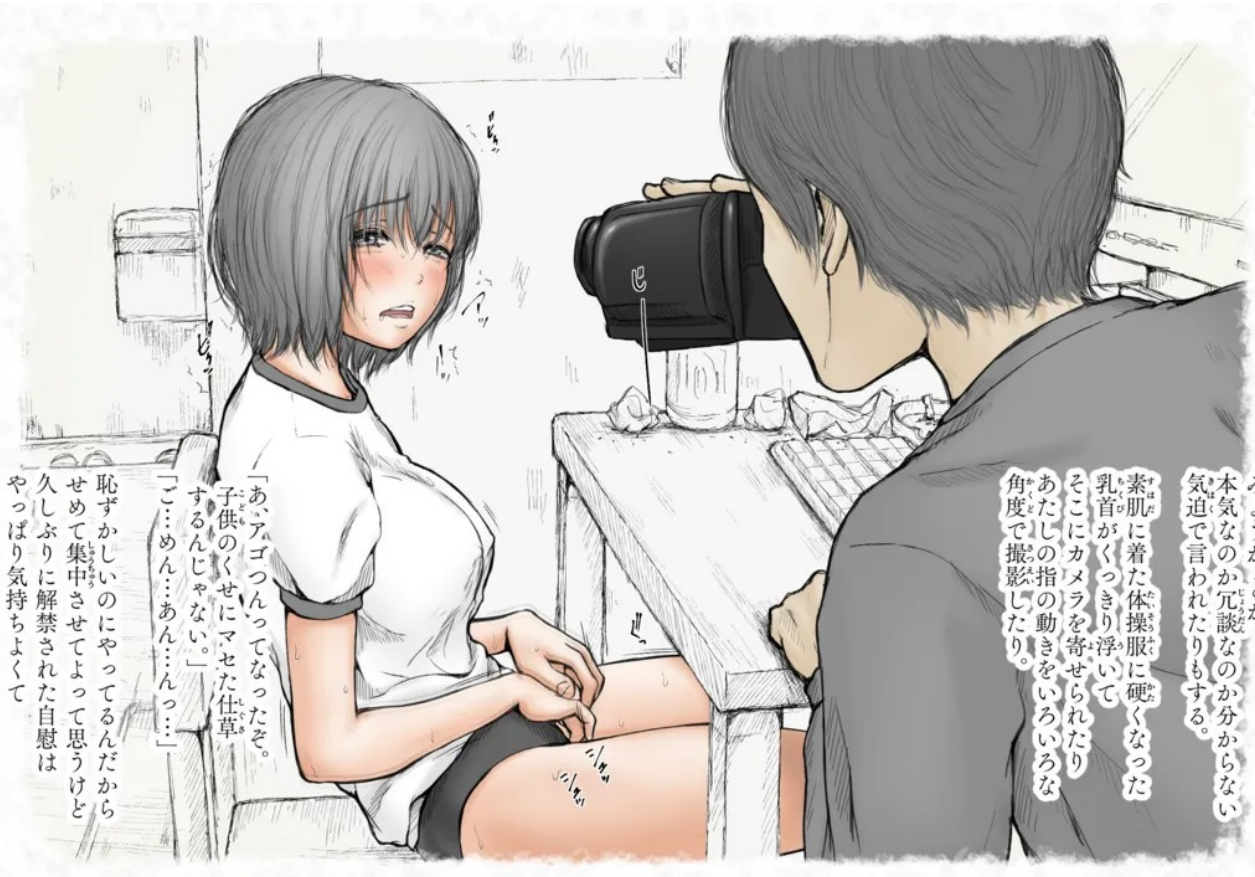
中学生の自慰映像は有志達にとって垂涎（せいでん）ものだから今度（こんど）インターネットに投稿（とうこう）してみようか、とか本気（まじめ）なのか冗談（じょうたん）なのか分からない気迫（きぱく）で言（い）われたりもする。

素肌（はだか）に着（き）た体操服（たいそうふく）に硬（かた）くなった乳首（ちちのこ）がくっきり浮（う）いてそこにカメラ（かめら）を寄せ（よ）せられたりあたしの指（ゆび）の動き（うごき）をいろいろな角度（かくど）で撮影（さつえい）したり。

「あ、アゴ（あご）つんってなったぞ。子供のくせ（こどものくせ）にマセ（ませ）た仕草（しぐさ）するんじゃない。」
「こ…めん…あん…んっ…」

恥ずかしいのにやっってるんだからせめて集中（しゆくちゆう）させてよって思うけど久しぶ（ひさびさ）りに解禁（かいしん）された自慰（じゐ）はやっぱ（やっぱ）り気持ち（きもち）よくてめっちゃ（めっちゃ）気持ち（きもち）よくて…

頭（かぶ）の中（うち）が痺（しび）れてきて、少しずつ思考（しこう）は塗り（ぬ）り変わる。



叔父さんの言う事に従い
叔父さんと一緒に
自分を辱める事が
心地よくなって…きた…

カメラのレンズが顔の真ん前に来る。
こんな貌を撮られている。

ずいぶん早く覚えた
マスターベーション。
誰かに見られたら自害だとか
思いながらやっていた
『知られてはいけない秘密』を
叔父さんに『記録』されてる。

パソコンではセックスが始まっている。
叔父さんのアレが
サイズ違いのあたしのアソコに
出たり入ったりしてる所のアップ。

その前後運動にリズムを合わせた
女の子の喘ぎ声が
タンタンっという肉の
ぶつかる音と混じり
スピーカーから流れている。

(あたし…こんな声…
こんな…嬌声出して…るんだ…)

TC 00:12 残 2時間10分
1997.3.2

ほらっ いけっ いけっ!

うんっ...

い...くよっ

ばっちり撮って
後で何回も観て
やるからな!

うん...んあっ
何回も...視て...

恥ずかしいはずの事を
心から望むようになる...

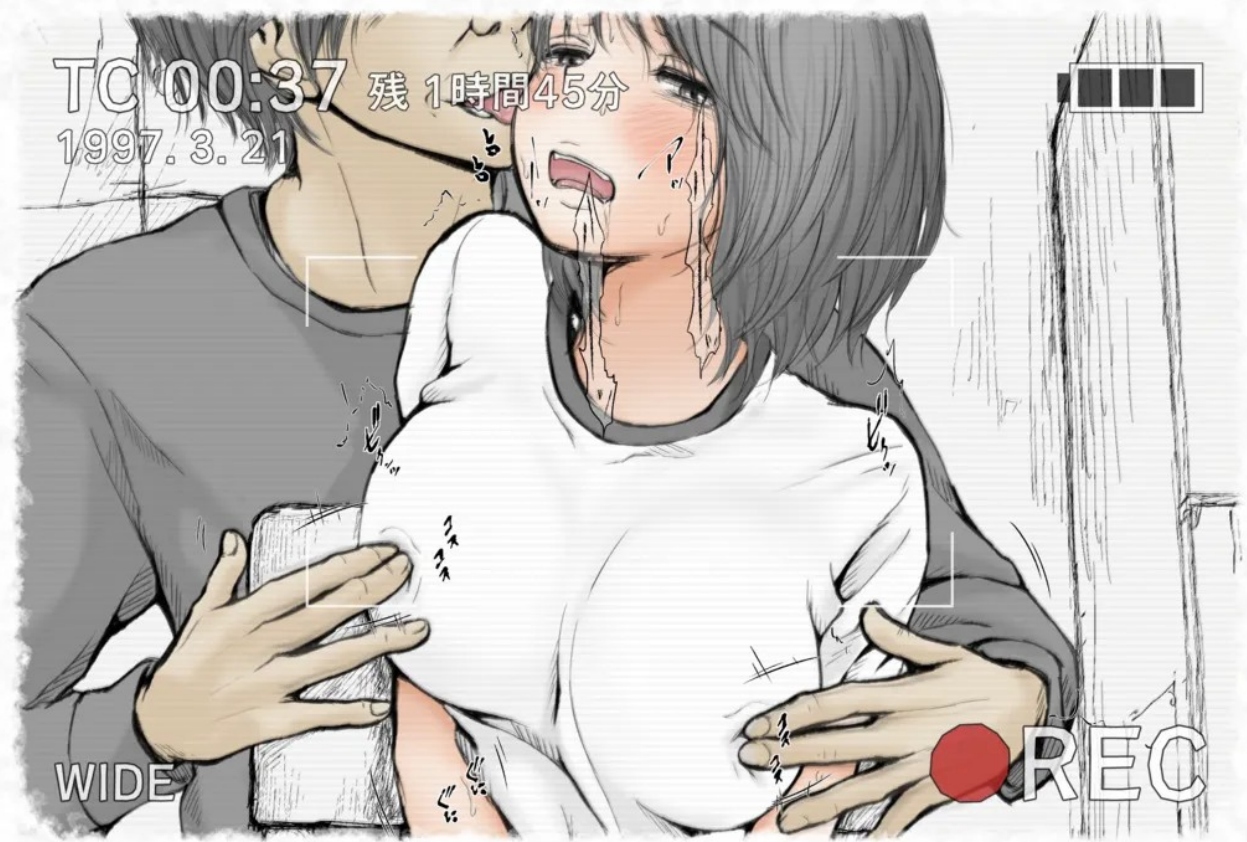
きっと、叔父さんの狙い通り
溜めに溜められた欲求の不足は
あたしの多淫回路の
奥深くまでを通电させて...

WIDE

REC







叔父さんはビデオカメラを三脚に乗せてあたしの自慰映像に加わった。息を整える暇もくれず耳元で8回目、9回目：はい次、はい次と急かされる。

陰内に2本指を入れたりとかもう少し奥までとかもっと速く動かせ。やっぱ3本だ。まだイくな。カメラを見ろ。自分のピーを見つめろ。ほらいけ。やっぱイくな。

あたじの手は叔父さんの指示に逆らえずこれ以上は無理という程の強い刺激を自らに浴びせる。

だんだんと本当に操られているような、身体があたしの意思を超えて動いているような気になる。

緩めようと思えば出来るはずなのにあたしの手はあたしの自我の外側からあたしを攻め続ける。

(手…ほんとに…勝手にうご…く…♡)

「ほらっ！ いけっ！ 今っ！ 今っ！！」

「う…んっ…あ…いっ！ ……くっ！ ……♡」





ワケわかんない程の回数を
(自分の手に)イカされて
へとへとになったあたしを
ひょいと抱え上げベッドに運び
お尻を上げた恥ずかしいポーズで
固められる。

「いっぱいイったなあー。
とれ……。」
うわ……びちよびちよ……。」

いやらしい声色を使い
にやにやと見下ろしながら言う。

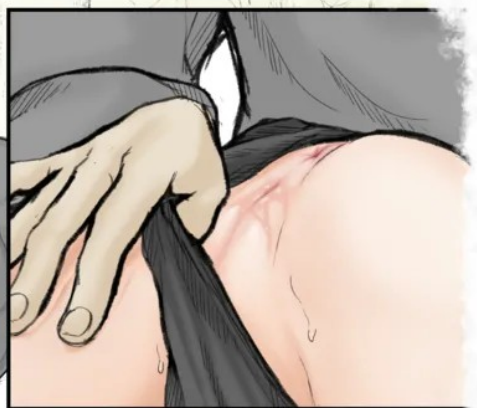
(検品されてる……)



あたしは、脳内の快楽麻薬なるものが
指先つま先まで沁み渡ってか
身体がいつまでも痙攣している。
できる事は、それでも恥じらいを表し
なけなしの抵抗を見せつつも
叔父さんの『次』を
期待しながら見詰め返すだけ。

叔父さんのされるがままに
蕩けたアソコを晒しているけど
恥ずかしいのに……気持ちいい……。

おじさんのニヤニヤに……
マゾの氣質が呼応してる……気がする。



「お尻が…こっちにも
えっちしてって
ヒクヒクしてる。」

「……………してない!」

「いやほんとにしてるんだって。
ひくっ…ひくひくっ…
シで…シでしてっ♡…って♪」

「…してない…に…決まってる…」

「ふーん。してないのか。
消極的。
だったら今日もお尻は無しかあ。
お前のお尻、ずっと楽しみに
してたのに残念だ。」

「…よく見たら…ひくひく…」

「ほらな♪ははっ♪」

この前会えた時はお尻でのセックスを
しなかった。
大晦日の時の、そんなに気持ちよく
無かったからかと思ってた。

あたしのコッチ…気持ちよかった?
楽しみにしてた? ほ、ほんと?

「具合良くしてくれよ？」
「うん…」

『お前のはまだ狭過ぎる』ので
叔父さんのアレが後で
痛くなるらしい。
だからしつかり解せ、と。

背中から手を回して窪みに触れる。
アソコの液がお尻にも届いてて
ぬめりには困らない。
はじかない程すんなりと
ソコはあたしの指を飲み込んだ。

今度は叔父さんは何も言わない。
ただ黙ってあたしの顔を見つめたり
お尻の作業を観察したり。

まぜまぜ
してる…♡

指示されないから余計恥ずかしい。
本当はセックスするトコじゃないのに
まだあたし13歳なのに
こんな変な快感覚えて…
ソコへ入れて貰いたくて…

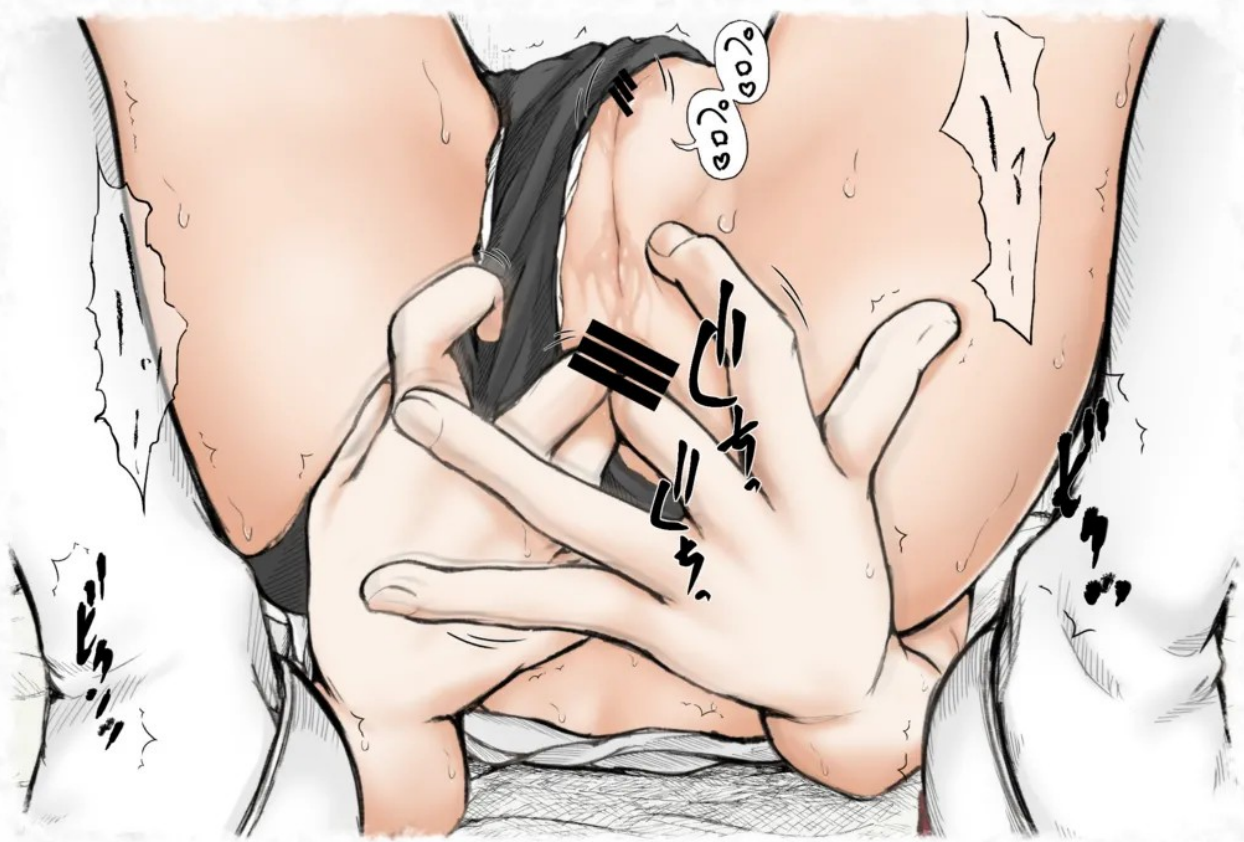
ペニスの持ち主に媚びるように
さらけ出しながら自分の指で掘り解す…。
発情期の雌がお尻ふりふり
そんな感じ。まるで動物。

恐ろしい程浅ましい行為に思えて
あたしみたいな性癖者には
やっぱそれが気持ちよくなる…。

さっきまでのオーガズムの余韻は
そして、容易にそこへ連れていく。







「ほんとしようがないやつだなあ…」

「恥ずかしげもなくあんな格好のまま
随分と簡単に」

「お尻でイってしまったあたしを
呆れたという表情で見やりながら
叔父さんはあたしに
次のポーズをとらせる。」

「ほら、指っ！」

「う、うん…あ…あん…」



「くれぐれもイくなイったら
分かるんだぞ!と念を押され
返事をする前に
叔父さんはあたしの一番敏感なアレを
口に含み、舌先でコロコロと
転がし始めた。」

「お尻とソレからの強烈な信号が
同時に脳内に押し寄せてくる。」

叔父さんの舌はとても器用に
あたしのソレを弄ぶ。
つついたり、弾いたり
ぐりぐり押し込んだり
こりこり擦ったり。

複雑で不規則で執拗な愛撫に
あたしの身体はついていけないくて
無意識に反射する筋肉の動きは
指先まで伝わり
ふいふい刺激をお尻に与える。

もう頭の中までぐちゃぐちゃ。

「あっ…イクっ…こめ…あっ
あんっ…んんっ！」
イっちゃだめだと言う割に
叔父さんからお叱りはなく
心の端で躊躇いつつも
果て続ける。

パソコンから流れている声と
今あたしの出す声が
部屋に響き渡る。

この壁の薄いアパートでは
隣の人の筒抜けだと思っただよ。



こうしていたのは何十分なのか
何時間なのか……
それぐらいイッてた。
いきっぱなしだった。

気が付いたら叔父さんの顔は
あたしの股から離れていて
おでこに汗を滲ませて
アレをシゴいていた。

「今日は……どんな日だ……？」
「……妊娠しやすい……日……」

「そうか……じゃあこのまま
お尻……するか？
それかゴムつけて……」
「おしりっ……おしり……入れて……」

「ふふ……もうアナルまで行ってる
同い年の友達っているか？」
「……ともだちが……いない……」
「そうだったな……ははっ……」
「……」



「激しくいじりまわしたせいで
その感覚はおぼろげに……
お尻の穴が開いているのか
閉じているのか触れて確かめないと
判らないくらい。」

「よし、ほらぐつと開け。」
「随分長い事解したんだから
めいっっぱいいぐっ……とな。」
「……うん……あっ♡……ん……」



叔父さんに言われるまま
めいっばい穴を掘げた。
こんなの普段なら
死んでもできない。恥ずかしい。
だってお尻の穴なんだよ。
決して中学生がする事じゃない。

「うお……」

「どうし…たの…?」

「いいねえ…いやらしい…」

「……」

「すごく…気持ちよさそう…」

「見てるだけで出そ…」

「………ほんと……?」

「そこ、入れて欲しいか?」

「……うん。」

「どこ?」

「……ここ」

「おしりまんこって
言ってみ?」

「や、やだ…そういうのは…超苦手…」

「フーン…変態ちゃんのくせに
この程度の隠語やなんだ。
思春期だな(笑)」

「……大人に…なったら…平気になる…
予定…」







叔父さんはゆっくりと
けとひと息に
ペニスを深々とあたしの体内に
押し込んだ。

前の穴からの潤滑液を
お尻の自慰で練り込み
柔らかくほぐれた筋肉は
叔父さんのペニスをきっちり
根元まで受け入れた。

あたしの粘膜は逆流してくる異物に
反射的な抵抗を試みるも
また別の本能が、もつとどうぞと
受け入れている。そんな気がする。

叔父さんが入ってくる間
あたしの頭の中はまっくら闇の中
あちこちで豆電球が
破裂してまわるような残影。

叔父さんが言うには
あたしの『前の穴』は
動作に加減が必要だと
感じるらしい。浅いとかキツイとか。

あたしは特に痛みなどは
感じないんだけど
叔父さんからすると
何かしら傷を
負わせてしまいそうに思っ
て全力は出せないって言っ
てた。
まだ産道が
未成熟なんだろうって。

だから容赦不要であたしを
ぐちゃぐちゃにできるお尻は
避妊も兼ねて『良し』なんだそう。



「腰細え…手…まわりそう…だぞ…」

しばらくは丁寧な前後運動で
直腸にペニスを

なじませていたけど

すぐにそれは烈しい動きに変わった。

あたしのウエストをお腹に指が
めり込む程に握り
自分の腰に引き寄せながら
同時に自分の腰も突き出す

あたしのお尻に叔父さんの…
ペニス周りの部位、なんて言うんだろ。
鼠径部？ 違う…？
まあ、その辺りのお肉が
ドンドンとぶつかってくる。



強く、遅く、粗暴。
暴行されてる錯覚すら覚える。
セックスに自信満々って感じ。



叔父さんは大晦日の約束を
果たすため

(あたしがお願したわけでは
ないんだけど)

無理なダイエットをして
強引に痩せた。
ほぼダンジキで。

数ヶ月で20 kg 近く
肉を減らした叔父さん曰く
「なんか体質が変わった。」と。

ペニスも良く…物っ…し
持続力も上がったとか、戻ったとか。
十数年若返った気分だと
嬉しそうに言ってる。
むしろ体調を崩しそうなものだけど
でも、たしかに顔も若やいでる。

きっと叔父さんの錯覚ではなく
本当に若返ったんだ。
あたしは身をもって実感してる。
実際にこの前の時は叔父さんは2時間近く
休みなくあたしを突き続け3回も射精した。



壊れるかと思った。
最後の方は
あたし半分意識失ってた。
初セックスの時は1回射精したら
勃たなくなるかも...
なんて不安がってたし
今のような力強さも無かった。

(それでも、めちゃくちゃ
気持ちよかったけど♡)

それが今の叔父さんはこう。
ま、とりあえずお通しね
とでも言わんばかりに軽い感じで
あたしの口へ射精。

生温かいドナルとしたミルクが
独特の匂いを鼻腔にまき散らしながら
喉に溜まっていく。



そういえば
『姪』に精液を飲ませるのは
遺伝的にとても背徳なんだって
興奮気味に言ってたけど
意味はわからないな。

そんな叔父さんの精液を
殆ど全部、口の中に収めた。

味わって飲み下す。

愛の喉ごし……♡
大人の味だ……♡

下から見上げる叔父さんの顔は
射精後の恍惚感と

精液を飲ませたという
征服感みたいなものが
表れている。

それが……嬉しい♡



身体はへとへとだし
頭の中は幸せでいっぱい。
正直もう満足なんだけど
でも叔父さんは、まだまだなんだ。
少なくとも、これから2時間は続く。
この程度では終わらない。
その先は未知。

ほんとに朝までこのままの
ペースで続くのかな……♡

あたし大変だ……がんばろう……♡



「…っ…ちゃんと名前で…呼んで…」

「うるさい♪どうなんだ？」
「んっ！…っ…きもち…いい…」

「もっと強く？ん？」
「あう！…もっ…もっ…」

「ほらっ！…ほらっ！」
「きゃっ！…あんっ♡…♡…」

叔父さんは、ひと息もつく事なく
あたしを転がし、腰を突き出させ
硬いまのソレをまたすぐ
お尻の穴に挿入してきた。

叔父さんは器用にも
ペニスを一定のリズムで
突き入れながら
あたしのお尻を右に左にと叩く。

「ほらっ！…ほらっ！」
「あんっ！…やっ！…あんっ♡…」

自分でも本当に不思議なだけで
叩かれた痛みがお尻から体内を通り
脳に到達する時
いつの間にか甘みを帯びていて
蕩けそうな心地に変わっている。
痛い、のに気持ちいい。
こんなの不自然…。

この…体質？気質？というものが
あたしの人生を完全に支配してる。
それを思い知る。

こういうのって大人になるにつれて
備わってくるものじゃないんだ…
あたしのはゼッタイ…生まれつき…。



お尻が真っ赤っかになる程
存分に叩いた叔父さんは
今度は背後からあたしに覆いかぶさり
体重を乗せ、身体で挟みこみ
身動きを取らせないようにして
遊び始めた。

腰の動きは変わらず一定で
お尻をズンズン攻められ続け
あたしは叔父さんの身体の下で
自動でいくエロ達磨のようにな
っていた。

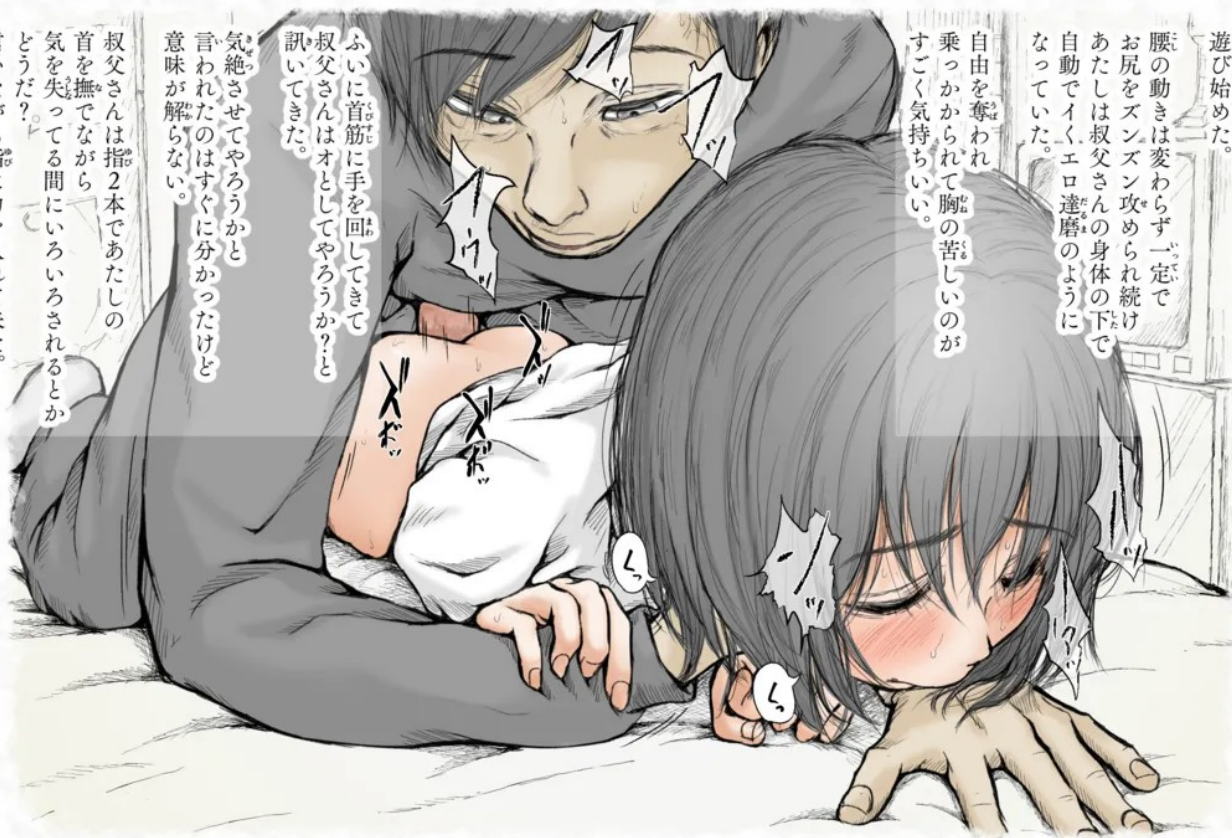
自由を奪われ
乗っかかれて胸の苦しいのが
すごく気持ちいい。

ふいに首筋に手を回してきて
叔父さんはオとしてやろうか？と
訊いてきた。

気絶させてやろうかと
言われたのはすぐに分かったけど
意味が解らない。

叔父さんは指2本であたしの
首を撫でながら
気を失ってる間にいろいろされるとか
どうだ？
言いながら指に力を入れて来た。

気管は開いてて息は吸える。
動脈(?)を圧迫されてるだけだから
苦しいいいってかん…じ…び…









...そうだ...
コスプレぐらいなら
いいか...うん...

寝てる女の子を
着替えさせるって
一度は夢みるよな...♪
うんうん



「起きたか？」
「…えあ…う？…ん……」

(…気を失ってた…の…?)

あたしの意識が戻ったのを確認すると
叔父さんは腰を揺すり始めた。
お尻にはもうペニスが入っていて
ほんの小さな動きで
あたしの身体は無節操にも
すぐにさっきの続きを再開する。

頭の中はまだ混濁してるけど
あたしの防衛本能かなにかが
意識の隅であわてて状況を整理中
…そんな感じ。

ほんとにびっくりした。
おばあちゃんに頼まれて
スーパーで夕飯のお買い物を
してたんだよ。

なのに急にこの部屋で目覚めた。
明晰夢ともまた違う現実味。
「オちる」って…こんな事になるんだ…。

意識を失ってる間に
なにされたんだろう。
お尻に入れる時とか何もかもを
じっくり見られ放題じゃないか。
変なもの撮られてないかな。

服も変わってる。

あれ…この服の色…どこかで見た…



「...の服...」

ろれつの回らない舌で訊くと
パソコン機のラックの上のところに
貼ってあるポスターを指さして
叔父さんは簡単な説明をしてくれた。

これ去年流行ったアニメのやつ？
不意に人生初コスプレだ。

似合うかどうかはおいという
サイズがぴったり。
あたしに着せようと思って
逢えない間
あれこれ準備してたんだ。
動かないあたしを
着せ替え人形みたいに
したのか...

それはソクゾクするな...♡
その様子ビデオ撮ってたら...
後で観たいな...
...あ...この感性って
やっぱり変態的なのかな...?



入ってる所がカメラに映るようにしろと
言われたので
脚を上げて叔父さんに乗る。
たぶんこれで撮れてる…
繋がってるトコの様子…

下から腰を突きあげられて
ずり落ちそうになる身体、全体重を
ほとんどお尻だけで止めてるから
お尻の穴はギチギチと振れる。

腹筋に力が入って
そうすると穴が窄み、圧が高まって
叔父さんはうしろで唸る。
唸りながらクリトリスを上下に
すごい速さで擦る。



自分でする時だって
どんなに盛り上がりつつも
こんな乱暴な動かし方はしないんだけど…

「おじ…さん…それ…き…もちいい…」
「そ…うか…ほらっ…おらっ！」

痛いぐらいの筈の、このめちやくちやが
今はすごく気持ちいい。
ちゅんちゅんという音が
部屋の外まで漏れる程に響く。
溢れ出るあたしの液体が叔父さんの服を濡らして
大きなシミをつくって恥ずかしい。気持ちいい。

TC 01:40 残り時間42分
1997.3.21

「あっ！……ひぐう……っ！」

ずっと、頑なまでに触らなかったのに
急に前の穴に指を3本も入れた。

お尻を突き上げる動きは
変わらずそのまま激しく
手首は前後、上下、左右と
あらゆる方向に動き
腔内では太い指が暴れている。
手の腹でクリトリスも握ねられて
あたしの女の子部分は
好き放題に蹂躪されまくってる。
何かを考える余裕なんて、ない。

突き入れる動きを
お尻と前でシンクロさせたり
ズラしたり……
決してマトモとは思えない
強い、烈しい快感に
動物のような声がお腹の中から
漏れ出てくる。

「お……あ……あ……おオ……」

それを別の自分が他人事のように
聴いていて
みっともないと思いつつも
気が付けばいつてる最中だった。

WIDE

REC

(これ…すごい…や…ばい…
自分でするのと…ぜんぜん違う…)

もしも…薄い本に書いてるみたいに…
2つのトコに同時に入れられて…
それで…何度も何度も
ガツガツってされたら…

何本もの太い腕で、大きな手で、強い力で
あたしの小さな肩や腰やお尻を
押さえつけられて…
クチにも入れられて…
胸も乱暴に揉まれて…
前後左右からガツガツ…

そんなのを何時間もされたら…

……考えるだけで…
胸が苦しくなる程に興奮する……

でも…いくらなんでも…
現実にはあるわけないか…

そんな事…



叔父さんは少し休憩するけど
お前は若いんだから休むな、と。

カチカチのままのアレを放り出して
仰向けになり
お尻でフエラチオしてくれと言った。

??

口でしてるみたいなフリすれば
いいのかな…

「啜える…ね…パ…あう…クっ…!」

ソレを穴にあてて
ゆっくりと中に含んでいく。

叔父さんのペニスを
身体の中に入れると
なんていうか感動する…

一人でする時に使う道具と
叔父さんのコレとは全然違う。
太さも、形も…存在感も。

無機質な物体じゃなくて
ずっと好きだった人の一部。
血の通った肉体。

深さを増すたびにお腹から
愛のような何かしら
昇ってくる感じ。

それを確かめながら
叔父さんの顔が快感に
様変わりするのを見下ろす。
…なんて幸せなんだろう♪



TC 01:45 残り時間37分
1997. 3. 21

「ちゅば…べ…ろ…」
「ははっ…それ…いいな…」

口で擬音を言いながら
お尻を上下させると
かわいいと褒めてくれた。

もつと上手に舐めなきやと思って
お尻のお口に集中して
ペニスの形を意識すると

「あ…あ……イ…ちや…っ…」

頭の中が叔父さんのペニスで
いっぱいになって
それどころじゃなくなってしまう。

「すげ…きもちいい…」

誰に言うでもなく、そう呟いた
叔父さんの顔は

もう本当に気持ちよさそうで…

それが例えセックスであれ

自分が人をこんな風に

恍惚とさせられる事に感動する。

あとで繰り返し観て

いっぱいシてもらう為に

一生懸命腰をふる。

もう撮影されるのに抵抗が
なくなってる事に気づく。

WIDE

REC

「あっやべっっ…」

あせった風に身体を起こして
叔父さんはあたしを抱きしめてきた。

お尻フェラチオが楽しくなってきた
ところだったけど

叔父さん、また射精ちゃう…みたい。

ベッドにお尻を着けたままなのに
一体どうやってるのか
小刻みに下半身を突きあげてくる。

腰に添えた手で、あたしのお尻の穴の
ペニスへの具合を微調整してる。

『あたし』を使って、より気持ちよく
果てようとする仕草は
つまり今『あたし』に夢中という事で。

これは…女ミヨウリだ…♡



ふぬっ！と鼻を鳴らして
叔父さんは全身を力ませた。
直腸内に熱い液体が放たれているのが
はつきりと解る。

幸せ♡幸せ♡

んんんと息苦しそうな声を
漏らしているけど
叔父さんの舌を
あたしは吸いついて離さない。
タバコ臭い鼻息があたしの鼻に
直接入ってくる。
荒い呼吸。熱い呼吸。

でも離さない♡
叔父さんの舌を喰べながら
あたしもイク。





叔父さんと繋がったまま
5分ぐらいずっとキスしてた。

口を離して、お互い何も言わず
しばらく見つめ合って
二人同時に照れ笑い。
親戚っていうのが、なんか
必要以上に恥ずかしくさせる。

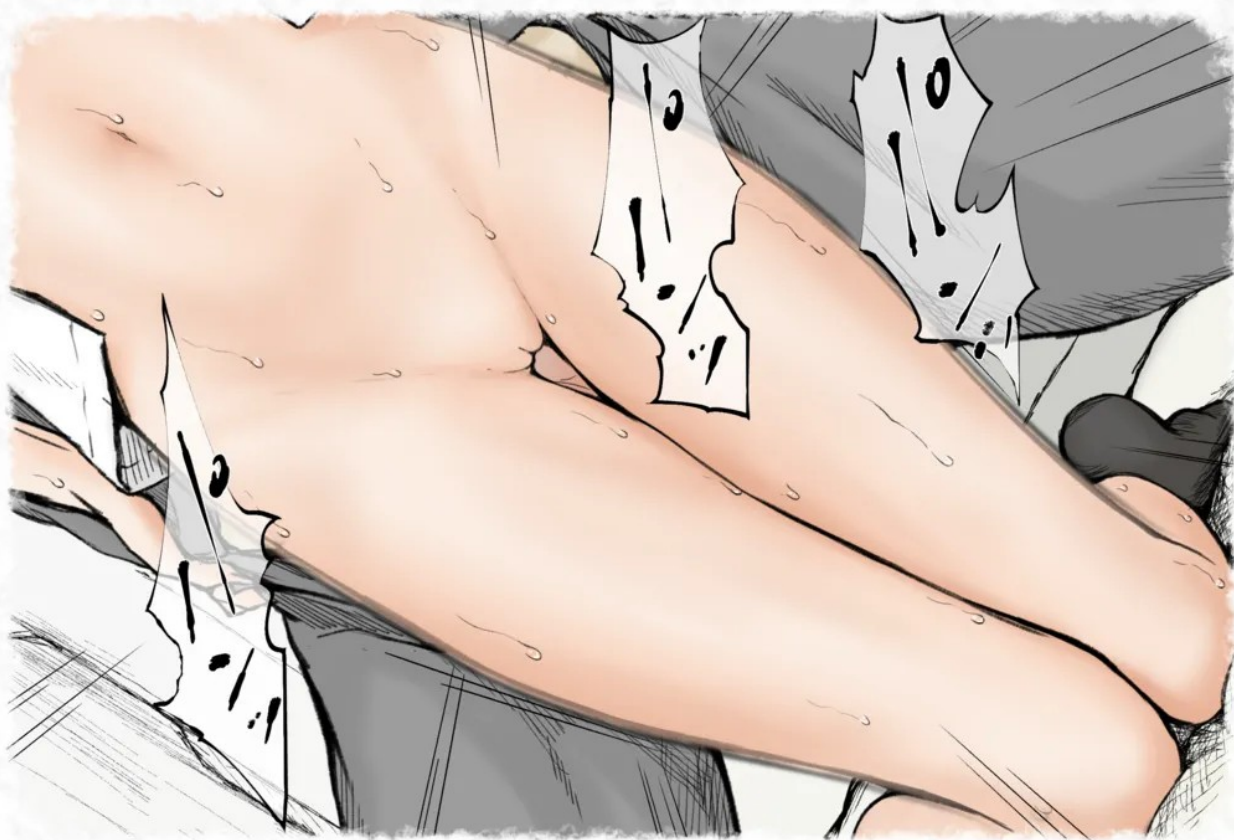


「お掃除…フエラ…する？」
「いや…お尻に入ってたぞ…」

例えば自分のお尻に指を入れて
舐めろと言われれば
物凄く抵抗があるんだけど
こうなった後はもう
自然な行為でしかなくなる。
快楽物質の不思議？

精液の味がするソレを
きれいきれいする。
手ばかりなく全て舐めとる。

叔父さんは敏感になったペニスを
舐られて、腰をびくびくさせながら
喘いで悶えている。
なんか…楽しい♡かわいい♡



3 回目に突入。
今度はすごく長い。
射精せずに
もう1時間以上も続いている。

叔父さんはずっとずっと
休む事なくあたしのお尻に
ペニスを出し入れ。
何度も何度も続けていくあたし。

あたしは『本当に』限界を
超えてしまい

オーガズムというものを
受け止める体力がもう無い。

頭の中はなぜか

『だめだめだめだめ』という声が
意味不明にこだまする。
でも、そんなの構わずイカされる。

ど…こが…
気持ちいいっ!!

ん?…ほら
言えよっ…!!

声小せえっ!!

まっ!んっ…
こっ!!

脳内の快楽物質も
言うなれば麻薬で
確か致死量ってあるんだよね。

なんか…脳が溶け始めてる
気がするんだよ…。

じゃなきゃこんな言葉
口に出すだけで
死ぬほど恥ずかしいのに…



もう自分の何もコントロールできない。
状況の認識もおぼろ。

『ここアパート...』
ぐらいいしか頭に浮かばない。

あたしたぶん叫んでるじゃないかな...

何時間も隣の部屋の人に聴かれてる...
迷惑だろうし...恥ずかしい...



でも止められないんだよ。
身体が自由がまるで無い。
今はいく事しか考えられない...

いや...いくしかできない。



TC 01:07 残 1時間13分
1997. 3. 21

ほらっカメラの
向こうの叔父^俺にっ！

姪っ、説ウ明っ！

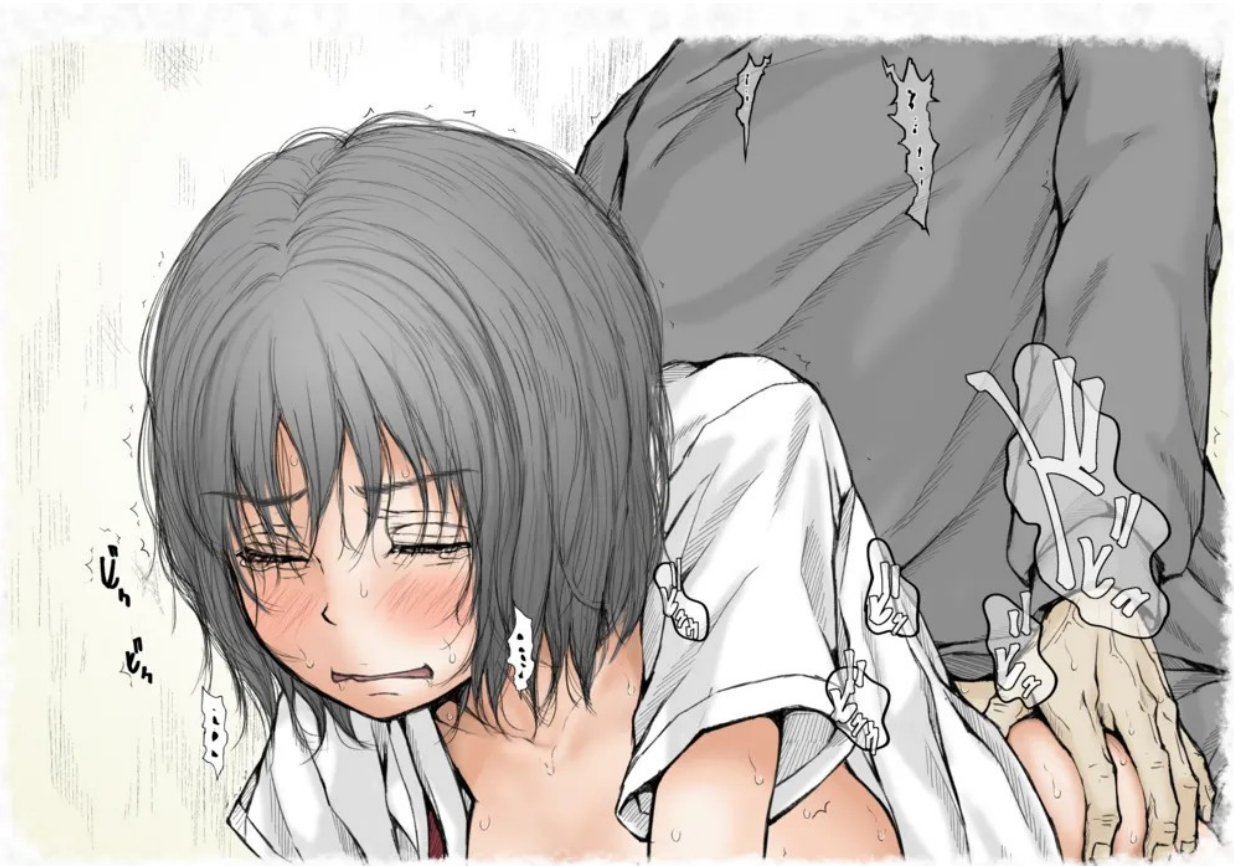
は…いっ…

あた…し…
おしり…まんこで
いま…からっ…
イ…く…よ♡

WIDE

REC







頭の中が…
本当に真っ白になった。
さっきオトされた時と
似たような…
ふうわあと宙に浮く感じ…

はあっ♡

はあっ…♡

幸せのスープみたいなのが
全身に、じんわり沁み渡る…
みたいな感じ…



股の間から、汗だくになって
ベッドにペタンと座る叔父さんが見える。

叔父さんは目に入った汗を手首でぬぐって
荒い息を整えながら
お尻の穴を開いてみせろと
言うてきた。

指をあてがい左右に拡げる。

くふっという泡の弾ける小さな音がして
お尻からあそこ割れ目に沿い
叔父さんの精液がベッドに垂れ落ちる。

その様子をあたしは
ぼんやりと眺めている。

あ……
おじさん……まだまだ
いけそうだな……

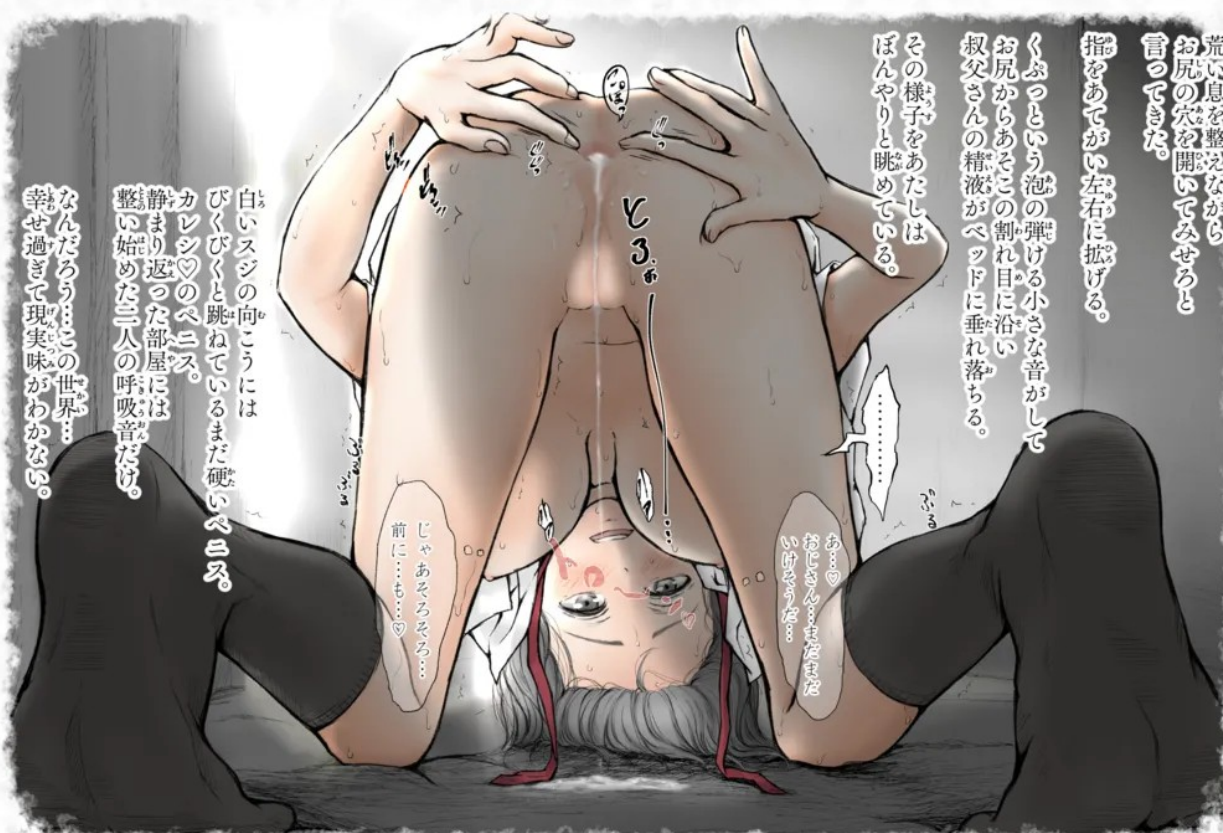
じゃあそろそろ……
前に……も……♡

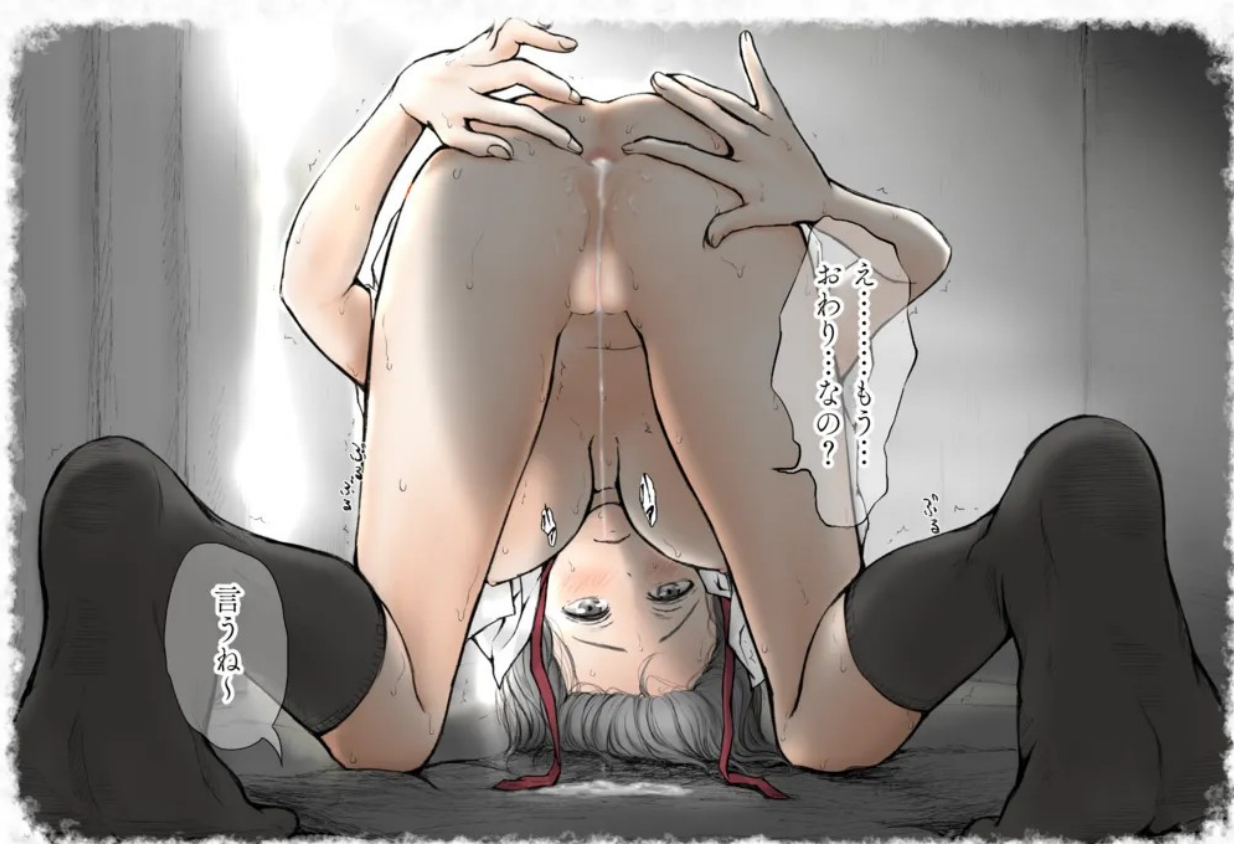
白いスジの向こうには
びくびくと跳ねているまだ硬いペニス。
カレン♡のペニス。
静まり返った部屋には
整い始めた三人の呼吸音だ。

なんだろう……この世界……
幸せ過ぎて現実味がわかない。

「精液……舐めてキレイにするから……
やっぱり……前にも……入れて……ゴム無しで……」

「はあっ……はあ……もう朝だよ……」





素敵な展開になった。

叔父さんの新しい勤め先は日給制で勤務に入れば入る程に

お給料は増えるという事で

シフトを代わって貰うのに

さほど難は無く——

同僚さん、欲しいものがあって

日数を稼ぎたいと

よく漏らしてゐるらしい。

もう少ししたら

電話して訊いてくれるみたい。

まず大丈夫だろうって言ってる。

つまり…今夜も会える…♡

あたしを家まで

送ってくれて

同僚さんに確認した後

叔父さんもすぐに

眠るそうだと

早く起きられたら

もしかすると、お昼から

また会えるかもしれない。

もし昼間会えるのなら

どこかに連れて行って

くれるみたい。

嬉しい♡

それはデートだ♡

人生初デート♡♡

嬉しくて耳たぶを噛む。

わい！

叔父さんにおんぶされるの
随分久しぶりだ。

へろへろで足が震えていたあたしを

若々しく蘇った叔父さんは

事も無げに担いで歩く。

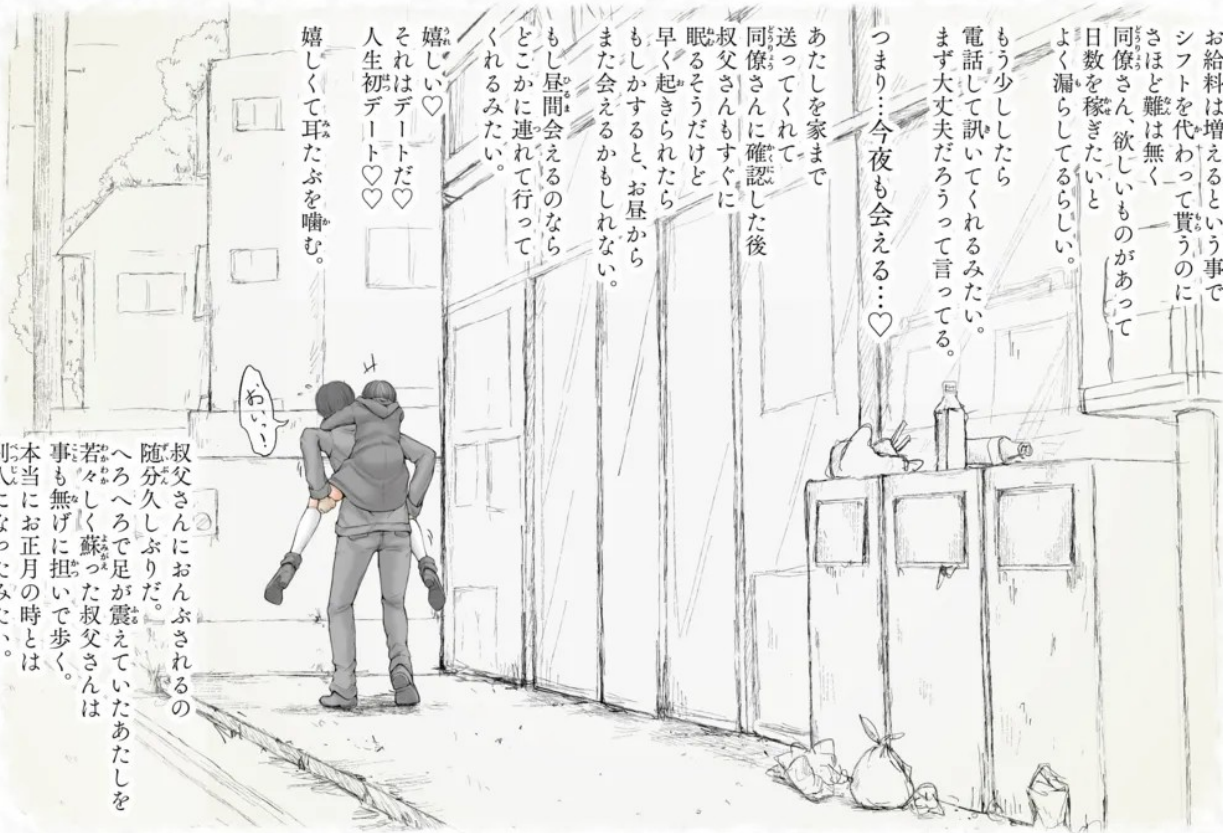
本当にお正月の時とは

別人になったみたい。

まるで前の…

あたしが小さい頃に憧れてた

あの頃のままの叔父さん…。



おんぶで到着。(超満たされた♪)

もう外はすっかり明るいのに
叔父さんは今日の締めくくりにと
道端での脱衣を命じて来た。

生家なので叔父さんも死角は
わかってて

この時間この位置なら人の目に
触れない。

とは言え野外で裸
おっかない。

でも…
ドキドキ…

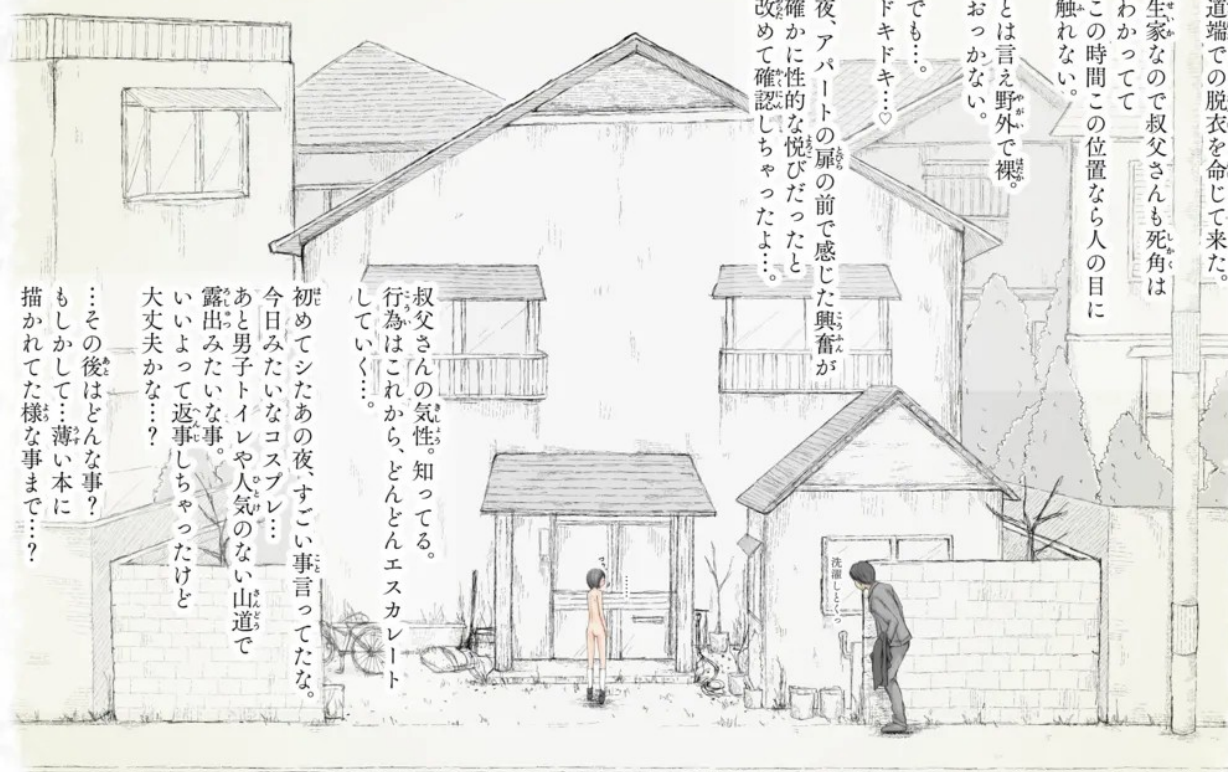
夜、アパートの扉の前で感じた興奮が
確かに性的な悦びだったと
改めて確認しちゃったよ…

叔父さんの気性。知ってる。
行為はこれから、とんどんエスカレート
していく…

初めてしたあの夜、すごい事言ってたな。
今日みたいなコスプレ…
あと男子トイレや人気のない山道で
露出みたいな事。
いいよって返事しちゃったけど
大丈夫かな…?

…その後はどんな事?
もしかして…薄い本に
描かれてた様な事まで…?

怖い気持ちもあるけど
興味が勝つなあ♡

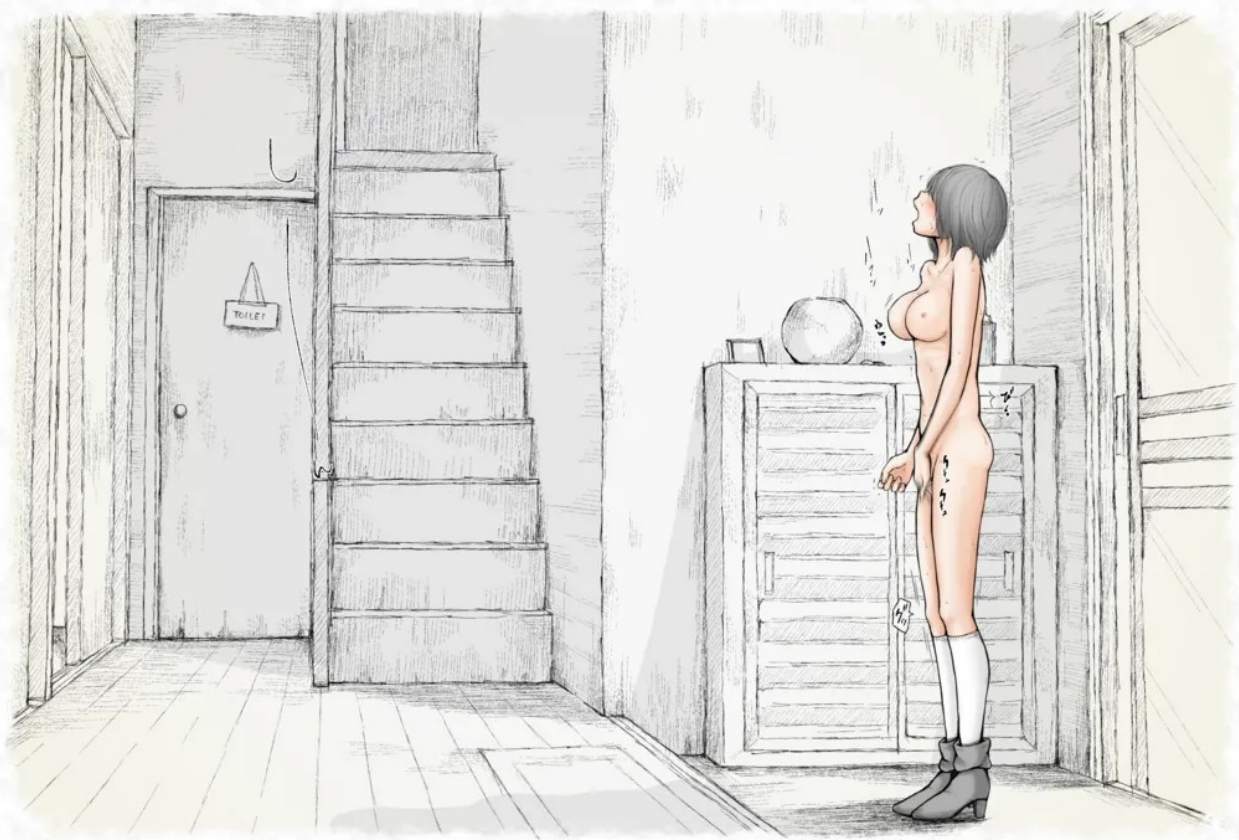


13歳には早そうだけど(笑)









静まり返った玄関。自宅。
自分の住む家。一番安全な場所。

ここに帰ってくると

さっきまでの非日常が

作り話だったかのように感じられる。

叔父さんはもう部屋に着いたかな。

あたしはまだ全裸のままで立っている。

おじいちゃんもおばあちゃんも

まだ起きてくる時間じゃないから

大丈夫だけど

こんな事、こんな場所で

しちゃいけないのに……

だ……め……♡

これ……♡
すぐ……イク……♡

アパートでされた事

今後の事……♡

その反芻と期待が

再びあたしの手から自由を奪う……

まだ叔父さんの支配が

続いていると錯覚する程。

このままココでイってみたい……

軽く……声我慢できる程度に……

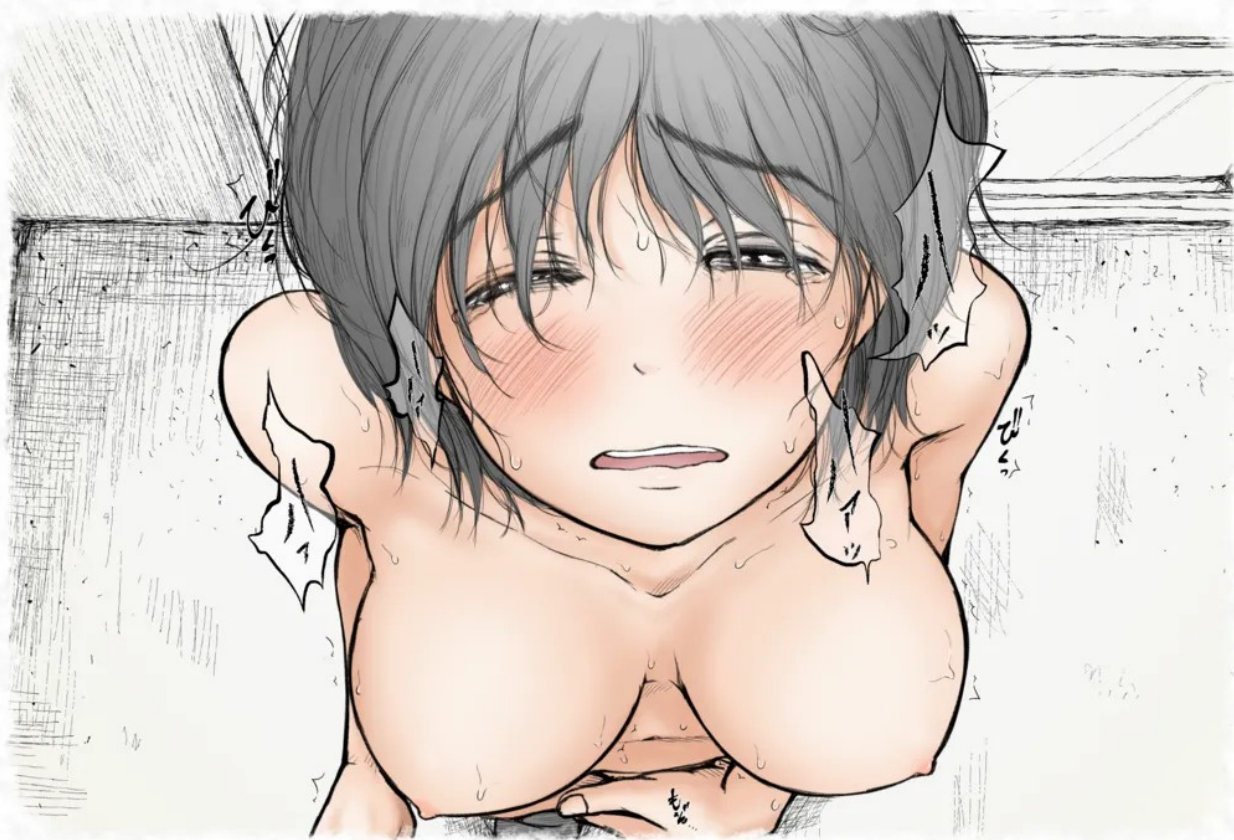
それで……

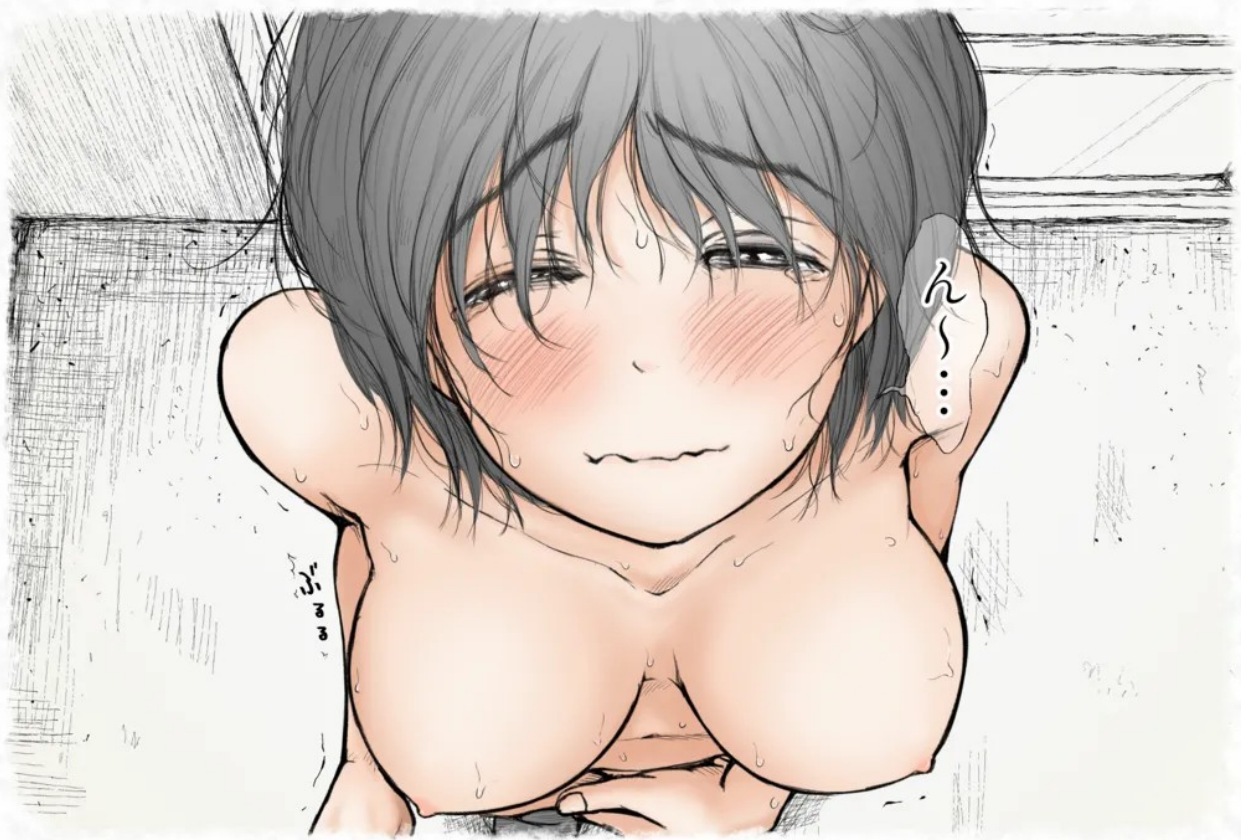
ちよつと言ってみようかな……

叔父さんが……言わせたがるやつ……

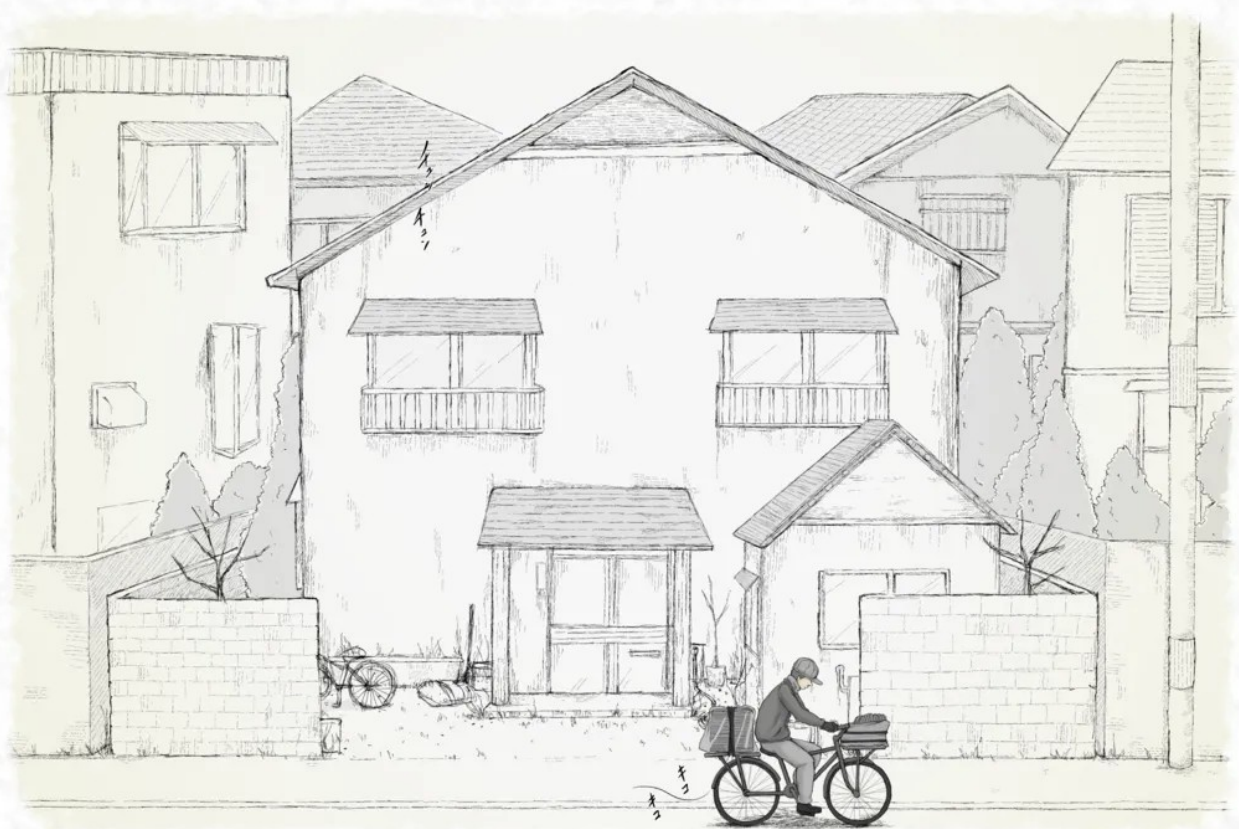


















本作品のご購入誠にありがとうございます。

『僕たちが過ごした懐かしい舞台の中
再び想い抱くあの頃への憧憬(あこがれ)…』

そんな空気感を、今回は姪視点にて
描いてみましたが
ただのロリ巨乳モノと評されても
反論はございません(笑)

拙い出来ではありますが
この作品が皆様にとって
何がしかのご一助になります事を
心より願っております。

下記ファンサイトにて
本作や他作品の関連ファイルなどを
配信しております。
是非一度おいでくださいませ。

真咲シサリ 2020.7.26

Fantia

ランドセル女児達のえっちな日常系。ときどきJC、JKも。

らん♪らん♪食堂

<https://fantia.jp/fanclubs/2625>



サークル website

あん♪あん♪食堂

(7月現在サイト引っ越し中にて
一時クローズになっております。)

ご連絡はこちらへ
tlbparts@gmail.com

ご注意

- 18歳未満の方は閲覧禁止です。
- この作品はフィクションでありファンタジーです。
実在の人物・名称・団体・事件・法律などには
一切関係ありません。
- 無断転載・違法アップロードは
お止めくださいませ。

© あん ♪ あん ♪ 食堂／真咲シナリ